金井紫雲編

藝術資料

秋草

第一期
第七冊

合名會社 芸艸堂刊行

K231
35
81W57828
消
国立国会
56.7.14
図書館

秋草松圖　傳山樂筆

智積院藏

藝術資料

第一期 植物篇

第七册『秋草』

要目

口繪

傳山樂筆　松に秋草襖繪（智積院藏）（原色版）
乾山筆　草籠秋草（原富太郎氏藏）（玻璃版）
傳烏羽僧正筆　鳥獸戲畫卷の中の秋草
稚兒觀音繪卷中の秋草
牧谿筆　芙蓉圖（總見院藏）
銀閣寺　蘆薄圖屏風一雙
傳永德筆　秋草圖屏風（泉聖院藏）
狩野派　秋野圖屏風（後藤新三郎氏藏）
友雪筆　秋草圖（西本願寺藏）
宗達筆　草花圖
光琳筆　秋草屏風（川崎家藏）
何帛筆　秋草花圖（東京美術學校藏）
景文筆　秋草小禽圖
南岳筆　草花繪卷の中
一鳳筆　秋草圖（藤田家舊藏）
抱一筆　秋草圖
芳崖筆　秋草鶉圖
道甫作　雛秋草硯箱
政誠作　秋草蒔繪硯筥見返（岡本東洋撮影二面）
秋草寫眞　桔梗透しの鉢（扉繪）
乾山作

本文

秋草概說……一
萩（はぎ）……三
尾花（をばな）（すゝき）……六
葛（くず）……八
瞿麥（なでしこ）……一〇
女郎花（をみなへし）……一三
藤袴（ふぢばかま）……一四
桔梗（ききやう）……一六
木芙蓉（ふよう）……一八
龍膽（りんだう）……二〇
紫菀（しをん）……二二
謠曲『女郎花』……二三
秋草の名作……二五
萬葉集の秋草の歌……二六
秋草の和歌……二八
秋草の詩……三〇
秋草の名句……三一

藝術資料

第一期 植物篇

第七册『秋草』

要目

口繪

傳山樂筆　松に秋草襖繪（智積院藏）（原色版）
乾山筆　草籠秋草（原富太郎氏藏）（玻璃版）
傳烏羽僧正筆　鳥獸戲畫卷の中の秋草
稚兒觀音繪卷中の秋草
牧谿筆　芙蓉圖（總見院藏）
銀閣寺　蘆薄圖屏風一雙
傳永德筆　秋草圖屏風（泉聖院藏）
狩野派　秋野圖屏風（後藤新三郎氏藏）
友雪筆　秋草圖（西本願寺藏）
宗達筆　草花圖
光琳筆　秋草屏風（川崎家藏）
何帛筆　秋草花圖（東京美術學校藏）
景文筆　秋草小禽圖
南岳筆　草花繪卷の中
一鳳筆　秋草圖（藤田家舊藏）
抱一筆　秋草圖
芳崖筆　秋草鶉圖
道甫作　雛秋草硯箱
政誠作　秋草蒔繪硯筥見返（岡本東洋撮影二面）
秋草寫眞
乾山作　桔梗透しの鉢（扉繪）

本文

秋草概說……一
萩（はぎ）……三
尾花（をばな）（すゝき）……六
葛（くず）……八
瞿麥（なでしこ）……一〇
女郎花（をみなへし）……一二
藤袴（ふぢばかま）……一四
桔梗（ききやう）……一六
木芙蓉（ふよう）……一八
龍膽（りんだう）……二〇
紫菀（しをん）……二二
謠曲『女郎花』……二三
秋草の名作……二五
萬葉集の秋草の歌……二六
秋草の和歌……二八
秋草の詩……三〇
秋草の名句……三一

秋草松圖　傳山樂筆

智積院藏

秋草然圖

樹山樂華

晉靖詔藏

草籠圖　乾山筆

原　富太郎氏藏

草籠圖　乾山筆

原　富太郎氏藏

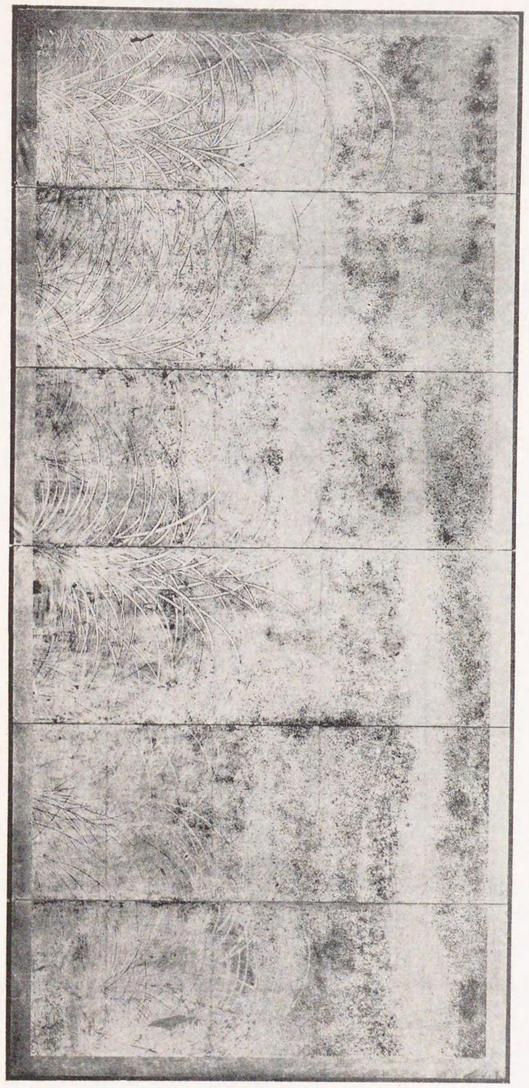
草蟾圖　萆山筆

鼠　富太浪丸蘇

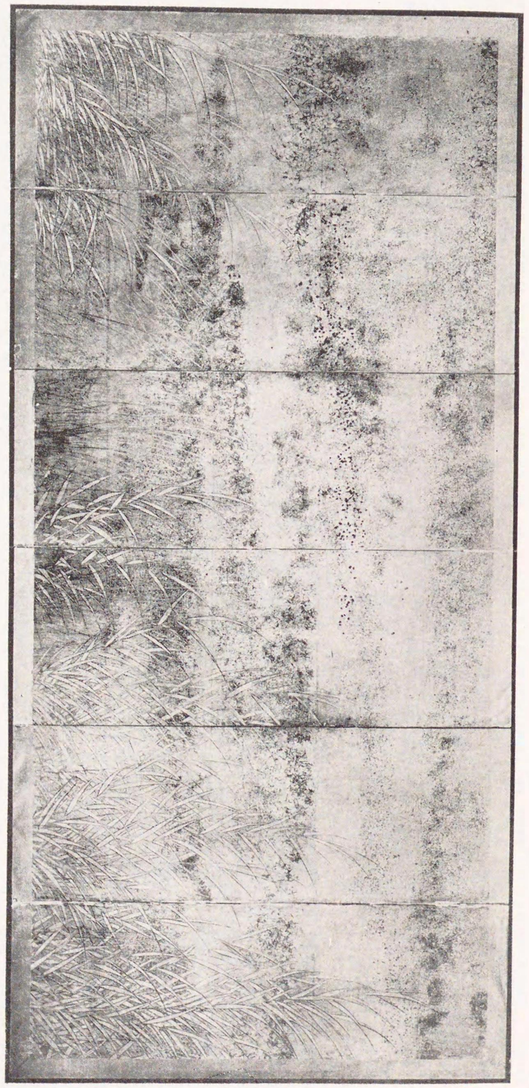
鳥獣戯畫巻の中の秋草　傳鳥羽僧正筆　（高山寺藏）

稚兒觀音繪卷中の秋草

水墨芙蓉圖　牧齋筆　（總目二院藏）



（桃山時代障屏畫集所載）



（銀閣寺藏）

傳相阿彌筆

蘆薄屏風

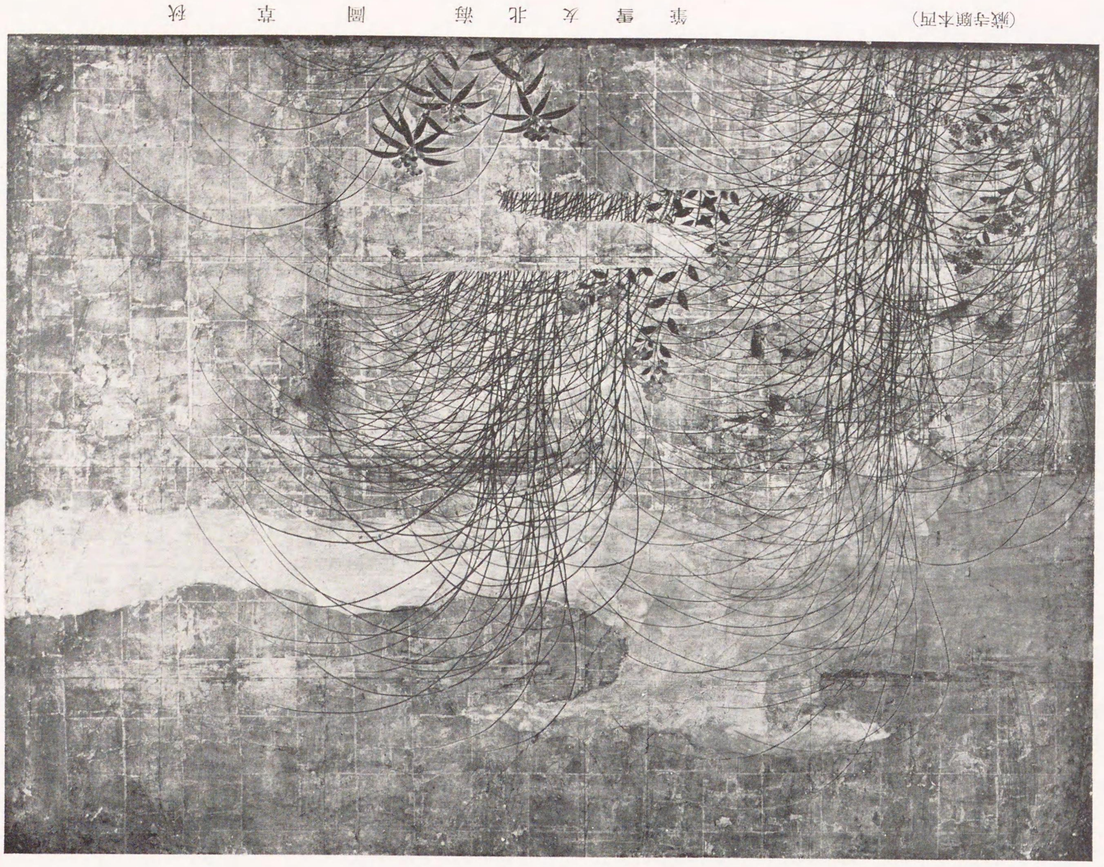
秋草圖　傳永德筆　（京都壽聖院藏）

（桃山時代障屏畫集所載）

秋野図

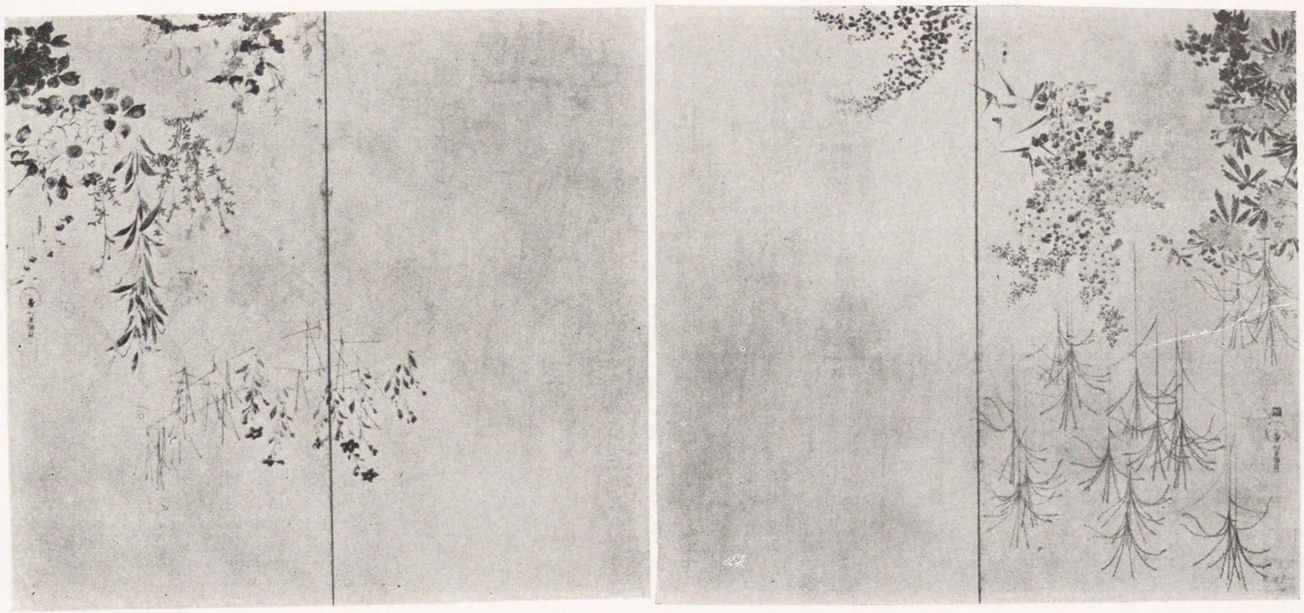
（後藤新三郎氏蔵）

（桃山時代屏風畫集所載）



(藏寺願本西)　筆　雪　友　北　海　圖　草　秋

草花屏風の一部　　宗達筆　　（故下村觀山氏藏）



筆琳光　雙一風屏草秋

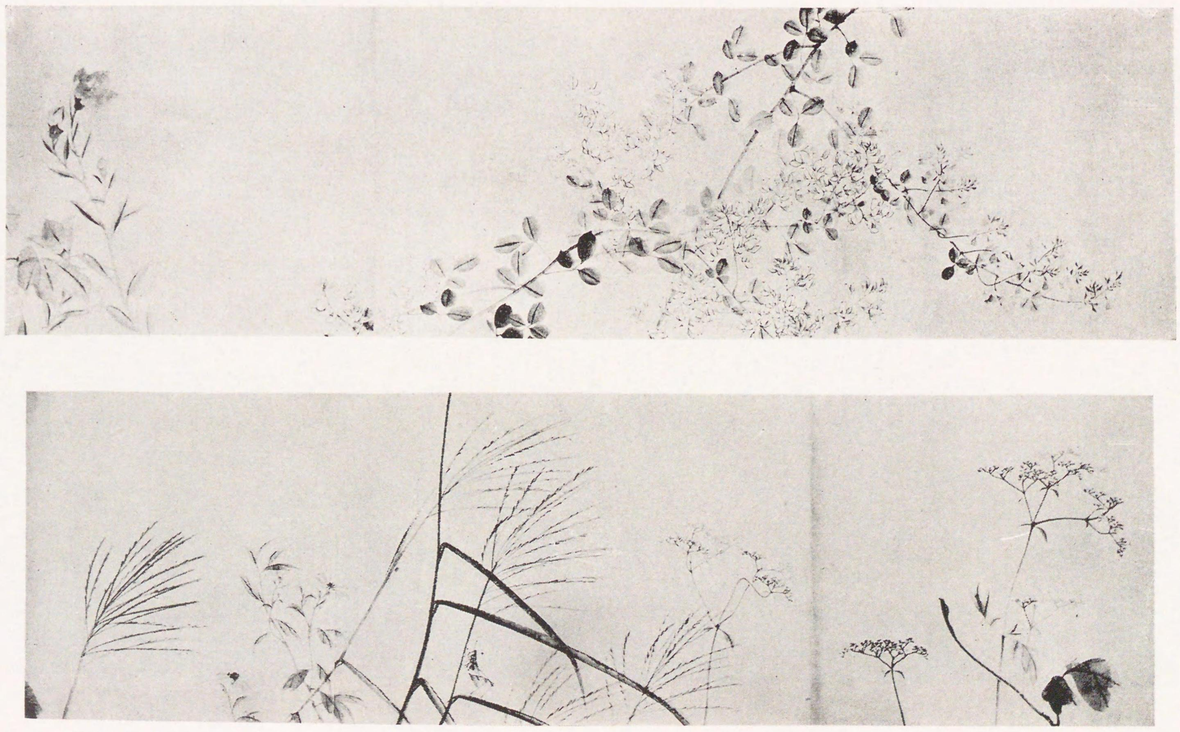
秋草花圖

立林何帛筆

（東京美術學校藏）

秋草小禽

松村景文筆

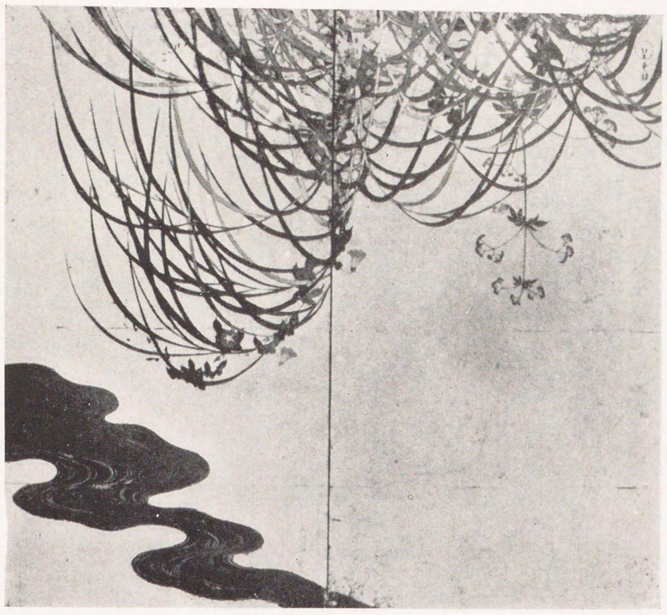


渡邊南岳筆　秋の中卷繪花草

（東京美術學校藏）

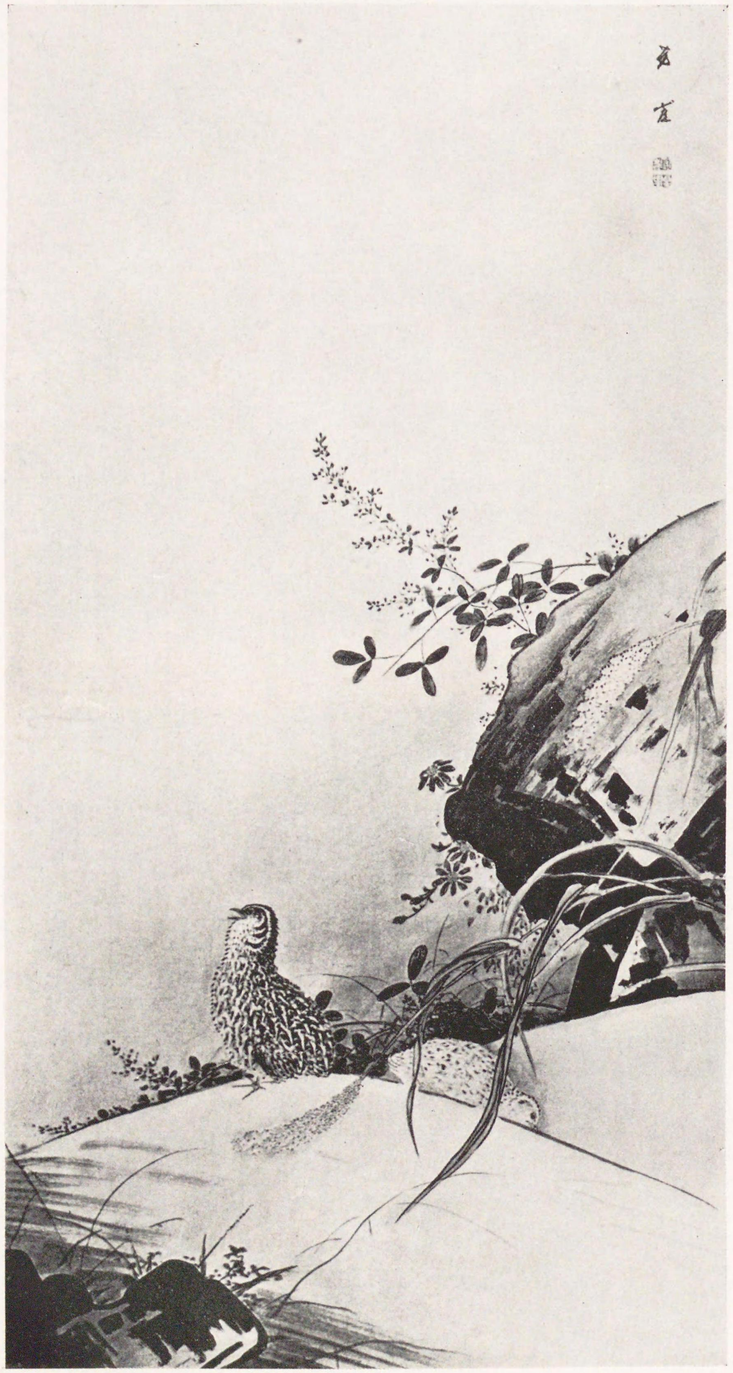
月下秋草圖

森一鳳筆



筆一抱井酒

雙一風屏草秋



秋草鶉圖

狩野芳崖筆

秋草籬蒔繪硯箱研出（返反）　政　誠　作

籬秋草硯箱　　道　市　作

影撮洋東本岡　　梗　　桔

影撮洋東本岡　　萩

金井紫雲編

藝術資料

第一期植物篇第七冊

草秋

合名會社芸艸堂刊行

K231
35

秋草概説

秋の野を彩る千草八千草は、それ〴〵に詩趣があり畫趣に富み、古來詩歌に物語に、繪畫に文樣に、これを表現したもの枚擧に遑もない位である。さてその數多い秋草の中で、如何なる植物が、最も藝術に深い交渉を有するかといへば、先づ秋の七草を隨一に推さなければならない、これは『萬葉集』の第八卷に載せられた山上憶良の歌、

秋の野に咲きたる花を指折りかきかぞふれば七くさの花

萩が花、尾花、葛花、瞿麥の花、女郎花また藤袴、あさがほの花

から出てゐる、山上憶良が、奈良の郊外をそゞろありきして、折柄咲き亂れた花の中から右の七種を選んだわけである『かき數ふれば七くさの花』とあるが、必らずしも此の七種ばかりではなかつたのであらうが、憶良の眼に最も印象深く映じたのが、此の七種であつたといふことになる。

此の中で、問題なのは『あさがほ』である、これは今日の朝顏ではなく、桔梗であるといふ說が重きを占めてゐる、或は木槿といふ說もある、今日の朝顏、卽ち蕣といひ牽牛花といふそれでないことは、別項に記した『萬葉集』に現はれた朝顏の歌を見ても明かである尾花は薄のこと、今更いふまでもない。

扨て此の七種を植物分類學上から見ると、次のやうに分類される。

萩	荳科	薄(尾花)	禾本科
葛	荳科	瞿麥	石竹科
女郎花	敗醬科	藤袴	菊科
桔梗	桔梗科		

右のやうに、七種とも多年生草本であるから年々根は殘り春先に芽を發し、葉が繁り、花が開くといふことになるので、いつも秋になると、同じやうな優艶なる姿を見ることが出來る、憶良は唯何心なく此の秋草を七種擧げたばかりなのであるが、それが今日まで儼として一種もぬきさしすることの出來ぬのは、花の姿がそれ〴〵に趣きがあるのと共に、これを選んだ山上憶良の藝術的鑑識に依るものといはなければならない。

その形狀から見ても、女郎花や藤袴の如き直線のもの葛や薄のやうな曲線の勝つたもの一々に特長があるし、色彩から見ても綠の葉はいふまでもないが、これに淡褐色の薄、紅紫色の萩や葛、黃色の女郎花、紫の桔梗、藤袴、淡紅の瞿麥といふやうに取合が極めてよく出來てゐる、殊に秋といふ感じから、濃艶なものゝないことも特筆しなければならない。

◇

向島の百花園を開いた梅屋菊塢は風流の道にかけては中々の含蓄があり、草木の鑑識にも長けてゐたが、彼れは此の憶良の七草に擬して、新しく七草を選んだことが太田南畝の『半日閑話』に記してある、曰く

墨田川菊塢のもとより、花團扇といふもの

56.11.11
81W57828

を送れり、表に七種の草花あり。

千草の中に其時によりてひもとくくさぐさの花を朝より暮までを書數ふれば是も又七種なれば、憶良歌にならひて菊塢

ねりの花、こしゆふがほおしろいの花

たまつさはひあふぎへかく龍膽の花

臣憶良に秋野新七種

黄蜀葵　卯の刻に花開き暮にしぼむ

射干　辰の刻に花開き其内に花盡落

龍膽　巳の刻に花開き未の刻に花合す

耳子花　午の刻に花開き子の刻に落花

火炭母草　未の刻に花開き翌日巳の刻に花しぼむ

壺盧　申の刻に花咲く

玉瓜　酉の刻に花開き開けば卽散る

覃按、夕顔は申時に花咲き明る旦の辰の頃まで盛るなり。

と、此の中で、耳子花と玉瓜とは何をさすか繪がないので、詳かに知るを得ぬが他の五種は秋草として中々面白い、但し夕顔は秋といふより寧ろ夏の末の花として知られてゐる。黄蜀葵を『ねりき』といふのは、此の草の根が粘液に富むので、搗き碎き製紙の原料とする處から來てゐる、一名『とろろあふひ』火炭母草は、紫茉莉科に屬する多年生草本で、北米合衆國の原産で、德川時代の初期に日本に渡來したもの、胚乳が白粉のやうなので此の名がある。此の花を加へた處などは、菊塢の最も新味を見せた處であらう。

射干は檜扇とも書く、山野に自生してゐるあやめ科の多年生草本で、その形も色彩もよく知られてゐる、菊塢は此の花を新七種の中に加へてゐるが、これも寧ろ夏草といふ感じである。夕顔は涼しい花として、昔から藝術に深い交涉を有し、文學にも繪畫にもよく現はれ、『源氏物語』の夕顔の卷のやうな優艶な作があるので、一層人口に膾炙されてゐるが秋草といふ感じではない。

◇

秋草として、憶良の七種に漏れてはゐるが情趣の深いものとしては、左の諸種を舉ぐることが出來やう。

紫菀　菊科　多年生草本

吾亦紅　薔薇科　多年生草本

苅萱　禾本科　多年生草本

雞頭　莧科　一年生草本

臙來紅　莧科　一年生草本

秋海棠　秋海棠科　多年生草本

金線草　蓼科　多年生草本

芙蓉　錦葵科　落葉性灌木

これらの植物は、それ〴〵に形も面白いし色彩にも特長がある、近頃更に新七種を選んで、メキシコ産のコスモスなどまで加へてゐる、コスモスの如き既に渡來後數十年を經過して今日では到る處に分布を見てゐるが、これを固有の秋草に比較すると、まだ十分に調和が取れない。

芙蓉は、支那の原産で、古く日本に渡來し各地に栽培されてゐるので、秋の花といふ感じが深い、元來『芙蓉』といふ文字は蓮の花のことで、こゝにいふ芙蓉は木本の木芙蓉をさすのであるが、今日では、既に芙蓉の二字を以て名とするやうになつてしまつた、秋の花を表現する場合は多く此の花が入つて一異彩を放つてゐる、本册には憶良の七草を主としてこれらの植物二三に及ぼしたのである。

萩　はぎ

萩は秋草の代表的名花で、山野に多く自生してゐる植物で、幹は冬になつても枯れず、春になつて新に芽を萠し、枝を生じこれの先に花をつける、葉は小判形で三葉づゝつき、葉裏には細かい毛がある、花は莖科の特長である蝶形であるが、小さく穗狀に咲くのが變つて居り、咲いてしまうとこぼれ落ちるので俗に『こぼれ萩』といはれる、花の色は普通は紫色であるが、種類によつて花に大小があり色にも變化がある、花が濟むと莢を結び、この中に種子がある、枝は伸びて垂るゝ特性があり、花は枝先に穗狀をなし、下部から漸次上部に及ぶ、花の色は紅紫色を普通とするが白花もあり、白色に紅を點じたものもあり、時に重瓣もあるが、單瓣の方が感じがよい。

名稱異名

萩といふ文字は日本の作字で、古くは芽子と書き、榛の文字を書いたときもある、萬葉集の長忌寸奥麿の歌

引馬野に匂ふ榛原入りみだれ衣匂はせ旅のしるしに

の榛に就いては學者の間にも昔から議論があつたが、歌の意味からして萩であるといふ說が勝を占め今日に到つてゐる、榛の音はハンで、これが轉訛したのではあるまいか、新井白石の『東雅』にも不詳として說を加へて居ない。漢名や異名雅名は左の通りである。

胡枝花、隨軍茶、天竺花、鹿鳴草、芳宜草、芽子草、野守草、庭見草、初見草、秋遲草、濃染草

この中で、鹿鳴草は、此花の咲き出で初めて鹿鳴くといふので此の名があり、出所は詩の小雅である。

宮城野萩

萩の中で、最も有名なのは宮城野萩で、仙臺附近の宮城野を産地とし、その中でも本莖木萩が開えてゐる、入江昌喜の『幽遠隨筆』にもとあらの萩といふのは、古枝より春葉のめぐみ出で、秋花咲るを木榛といひ、常の萩は草なり、古枝に花咲は木榛にて本あらきゆへ、もとあらのこはぎとよむと心得たるを宗久、都のつとにいはく『宮城野の木の下露も、まことに笠もとりあへむほどなり花の色々錦をしけるとみゆ、中にももとあらの里といふ所に、色なども外にはことなる萩のありしを一枝折て

宮城野の萩の名にたつもとあらの里はいつよりあれはしめけむ

此里の名によりてもや、よみはじめけむとはじめて思ひあはせられ侍りと云々、宮城野にもとあらのさとありし事知るべし。普通の山萩の中で、最も美しいのが宮城野萩である。

その他の種類

宮城野萩の外の種類は左の通りである。

引馬野　古歌の引馬野は遠江にある、宮城野に相對してつけた名、此の萩の特長は枝が垂れ伏すことなく立つところにある。

濃萩　形小さく、花の色が濃いので此の名がある、小萩と書くのは別種といふ

絲萩　名の通り枝が細くして絲の如く花形可憐に、畫趣に富む、古來濃萩と相對照して珍重されてゐる。

雀萩　これも名の通り花形小さく、枝も亦長くならない。

蒔繪萩　花の色白く、三四輪づゝ咲く、葉の形よく、古來蒔繪には多く此の萩を畫いたとて此の名がある。

二葉萩　この種は本阿彌光悦が珍重して京都鷹ヶ峰附近に栽培したものといふ、光悦が繪畫に蒔繪に描く處多く此の萩であつたといふ。

薯萩　薯萩は俗に筑波萩といふ、普通原野に自生する種類で、支那では靈草となし百年にして一莖生じ、百莖生ずるものは必らず神龜あつてこれを守るなどというてゐる葉が直立し花細かく普通の萩とは全然形態を異にしてゐる。

萩　寺

萩の名所としては、古來引馬野、宮城野、高圓野が聞えて居る、東京附近には、龜戸と日暮里に萩寺があり、龜戸の萩寺はもと本所押上にあつたもので、有名である、蜀山人の『一話一言』に曰く

本所押上村龍眼寺を萩寺といふ

龍眼寺和尚萩を數寄て數莖をうゆ、予に詠ぜよといふ

きゝしより見る目ぞまさる此寺の庭におりしく萩のにしきは　高辻大納言家長

此寺に碑をたてゝ芭蕉翁の發句をかけりぬれて行く人もおかしや雨の萩

近ごろ萩寺にゆきてみしに此の碑なし。

此寺、『嬉遊笑覽』には龍源寺とあり、龍泉寺町の正燈寺にも萩を多く植うと見えてゐる。

妙法院の萩

京都妙法院にも萩の名種があること、黒川道裕の『遠碧軒記』に記してある曰く

西行が仙臺宮城野の萩をとりて、慈鎭和尚へおくるを慈鎭より先代の妙法院のおくるものにわけておくらるゝ、今妙法院にあり。

詩

萩の詩は支那に見えず却つて日本の詩人に多い、德富蘇峰氏の『萩』から二三抄錄す。

甑鹿鳴草　大江　佐國

緣底玆亭感難禁、鹿鳴草是足憐看、
始移二野逕煙雲外一、今種二郁茅里第千一、
嫋娜夕枝追吹動、嬋娟曉色冒霜殘、
勻潮晉客泛籬菊、艷唉楚人叙二佩蘭一、
雪牕何堪秋詠筆、黃庭其奈吾燒丹、
蓬爲俗骨露滋地、蓮不生長池冷端、
屢送薰香嵐自遠、斜臨錦繡月猶寒、
蕭條興味獨非我、想像當初夢興安。

萩　林　述齋

胡枝花似二紫雲一橫、娥娟風姿太有情、
但怪唐人無二賦詠一、救荒譜裡徒存名。

同貫名海屋高臺寺看二

胡枝花一　梁川　星巖

七里紅欄遂水斜、櫻唇桃面鬪二客筆一、
佳期別在秋山裏、來着雨餘間澹花。
肯與尋常花草比、藥雲簇紫滿幽庭、
微香妙色心如記、曾誦西天纓絡經。
從他鐘聲苦催歸、戀賞聯肩立落暉、
風疊紫瀾香乍逆、翠園黃蝶木蘘飛。

伊達政宗と萩

東京府下五日市の在、横澤に大悲願寺がある、前に彼岸寺ともいうた、その寺は伊達政宗の書簡一通ある。左の通りだ、

追而略式に候へ共、任折節小袖一重進候
以上

態以二飛脚一申入候、先度は參遼會面本望候仍無心之申言候へ共、御庭の白萩一段見事候は所望致候、先日は申兼候而罷過候、預候御可忝候、猶期後音候、恐惶謹言

八月廿一日　松平陸奥守政宗(花押)

彼岸寺御同宿中

何たる風流ぞ、彼の元龜、天正、慶長、元和、寛永を通じての横着者、獨眼龍政宗の言草としては、洵とに殊勝ではないか『先日は申兼候而罷過候』の一句、如何にも面白い、當時如何に寺僧が、その白萩を愛惜したかが思ひやらるゝではない乎、それを後から欲しくて禁じ難く態と特別仕立の飛脚便を以て、所望したる政宗の襟懐は流石に日本の名將といはねばならぬ。　德富蘇峰——萩——

萩をめづる詞

老ては物のきようすくなきならひなるに、いとゞ病がちなる身の、よろづにものうくてうちこもりてのみ日をふるを、ある人まて來て萩もやゝさかりになりぬなどか野へ見にとは思ひそゝかざる、かしこのお寺、ここの園生など、とり〴〵に人あくがれゆくとぞいふなる、いざたまへ、かくてのみやはなどゝそのかせば、さすがに心はうごけど、かちより又あまりに人のしげからんもむづかしかるべしと、いらふるを、いざやわがいざなひまるらするは、さるかたならず、君もしり給ふらんすみだ河をさかのぼる事いくばくもあらで入ぬるいそに掉さしとゞむる所なりといへばさりけり〳〵そはわれもまた人にとはれも問ひなれたる宿ざまある人の往來もいとゞすくなきあたりにて、舟路のほどもたゞならぬをとて、ともなひゆく舟よりおるれば、白ひげのもりを左に秋薬の社を右にして、秋のけしきなか〳〵に世はなれて見ゆるもをかし、門さし入れば、あるじよろこびてむかへいづ、みさかなには何よけんなどいふもつき〳〵しう、やがてあはびさだをかにはあらぬいもも根ぬなはなど所につけたる物調じいでゝあるじしたり、酒たうべつゝうちながむるに、はたはり廣き庭をいくむらのにしきをかしきたらんやうにこゑわたしたるは、いと見所あり、これは宮城野の種なりといふ、けに花ぶさ大きやかにて、ながくれたるは世のつねのにほひならずさをしかもさそはれぬべし宮城野の秋をばこゝにうつし來にけりあるじにさかづきすゝめとていざさらば袖にほはして秋萩の一花ころもきてやかへらんかへしいくたびも露わけ衣きてをみよなど一花と思ひおくらんある人花にそむ心ぞあかぬ夕かけてわれもひもとく萩のあそびは又、あるじくれぬとも家路なとひそ秋萩の色なる露に月ややどらんよるのにしきにはなさじとおもふあるじの心ばへもそゝまゝをしきゆふべになん　春海

右梅屋鞠塢壁上に所有寫辛未九月二日杏園

—太田南畝—一話一言—

尾花をばな。すゝき

尾花は『すゝき』のことである、萬葉集では乎花と書き、『すゝき』には芒、又は薄とも書いてゐる、漢名には芭茅、又は杜蘩とあるがあまり使はれてゐない、禾本科の多年草で、本邦到る處に自生して居り、秋になると穗が出て、のちにこれが白くほける、その風に靡くさまが、風情があり、且つ物のあはれを感ぜしめるので、憶良は七草の第二位にこれを數へてゐるが、柿本人麿は、

人はみな萩を秋といふいざ吾れは尾花が末(うれ)を秋とはいはむ

と尾花を推稱してゐる、かうして昔からよく知られてゐるので、文獻に現はれてゐることも極めて多い。

異名と雅名

唯に尾花といひ、『すゝき』といふばかりでなく、異名や雅名をつけることの好きな古の歌人は、いろ〳〵此の草を呼んでゐる、曰く『秋知り草』『山下草』『風もちぐさ』『露やぐさ』『ねざめぐさ』『男草』『濃露草』『風聞草』『袖波草』などゝある、『秋知草』は『藏玉集』の俊成卿の

ね覺して秋知り草の風よりや老の袂のまづしほるらん

から來てゐるし、『露やぐさ』も同『藏玉集』のをる袖のをらで忘れし露やぐさかりそめの間の花の袖かも

が出處である、一說にはこれらの異名や雅名は、『すゝき』でなく荻の異名であるとの說もあり、尾花それ自身が、『をぎのはな』の略であるとされてゐるが、憶良の場合は將に薄であり、古は荻の花も薄もひとしく尾花と呼んでゐたといふのが事實らしく、その證としては、萬葉集にも、荻は荻でちやんと妹なろがつかふ河津のささら荻あしと一言語りよらしも

などの歌があるのでも知られる。

はだすゝき

萬葉集第八卷には、有名な元正天皇御製

はだすゝき尾花逆か葺き黑木もてつくれる室は萬代までに

がある、此の場合、すゝきと尾花と續けて讀まれてゐるが、これも荻と薄とを共に逆に葺いたと解する向きもあり、志賀忍の『三省錄』などには、

御釋に云ふ、すゝきも尾花もおなじものなるをかくつゞけさせ給ふは、庭の鳥かけの垂尾などの類なり

と薄と尾花を同一のものとして呼んでゐる。尾花はすゝきの異名なり、獸の尾に似たればかく云ふにや　小野高尙—夏山雜談

一むらすすき

『一むらすゝき』といふのは、謠曲『井筒』に『語れば今も昔男の、名ばかりは、在原寺の跡荒れて、松は老いたる塚の草、是こそそれぞ一村すすきの穗に出づるは、いつの名殘なるらん』

とあるのから聞えてゐるが、此の物語はいふまでもなく、『伊勢物語』の筒井筒の段で、それは大和の石山といふ處になつてゐる、石上寺といふ處があり、そこに古井があり、薄一もとを植ゑて其名を傳へてゐること、建部綾足の『折々草』に記してある。

尾花の名所

尾花は到る處にその群落を見るが、武藏野は殊に昔から聞えて居り、草より出でゝ草に入るといふ月影は好個の畫題になつてゐるしその草を代表するものは實に此の尾花である既に穗に出た芒が野一面を蔽ひ、これらの葉末にはそれ〴〵露の白玉を結び、遠く富士の高嶺が聳えてゐたり、或はその露ふき結ぶ芒原に大きな月が草の間から登つたりする處は將に好個の畫題で、それが北條氏康の『東關紀行』を彩つたり、『伊勢物語』の業平東下りを想ひ起さしめたりする、實際武藏野と芒とは離すことの出來ない關係にある、併し今日では武藏野も住宅地と化してしまつたので、昔ほど豐富でない、併しまだ處々にその面影は殘つてゐる、この外、高圓野、來栖野、忍の關などが薄の古歌の中に讀みこまれてゐる兎も角も武藏野は、芒の名所として聞え、古來繪にもよく畫かれてゐる。

芒の種類

尾花にも、多少の種類がある、併し多くは園藝的に命名されたもので、時に古歌などによつて名付けられたものもあるが、これは甚だ少い、一般的に行はれてゐるものゝ名稱で、何れも古くから稱へられてゐる。この薄は篠薄で、篠に交る薄の謂ひか。

糸すゝき　その名の通り葉で、よく盆栽などに仕立てられる

いとすゝきなびくけしきもしるきかな風ふきかはる秋の夕暮　西行　上人

縞すゝき　葉は縦に白い縞の入つたもので普通の芒よりは葉が細い、瓶花などによく用ひられる。

野すゝき　一般的に山野に自生してゐるもの、十五夜に剪つて月前に挿したりするのは多く此の種である

むらさきの一もとすゝき萬代にむさし野にこそ思ふべらなれ　中納言兼輔

鬼すゝき　野すゝきの中、葉の幅廣く長く丈けも高く、往々にして葉の緣で皮膚を傷ることなどあるより此の名がある。

鷹羽薄　葉に白と綠が段々になり鷹の羽のやうなので此の名がある、野生も稀にある類

俗謠の尾花

露は尾花と寢たといふ、尾花は露と寢ぬといふ、アレ寢たといふ、寢ぬといふ、尾花が穗に出てあらはれた　——うた澤——

◇

あふさきるさにみだれて今朝も尾花がくれに立ちどまる　——松の葉——

◇

露にみだるゝ糸薄そよ〳〵吹來る風にも靡そろ現なや正たいなしやと思へども、そもじと我とは、よろづ世までも千代までも　——松の葉八ほた——

葛　くず

葛は荳科に屬する多年生草本で、纏繞性であるから、或は地上を這ひ、或はものに絡はり、盛に繁茂し、よく一丈より三四丈に至る葉は三葉づゝを一朶とし、表は青く裏はやゝ白味を帶び、花は淡紫紅色で、花梗に數十輪をつけ、藤のやうであるが、垂れずして上に向く、花がすむと莢を結ぶ、白荳の莢に似て狹く薄く、褐色の細毛を生じてゐる、根は蕪の如く、また土瓜のやうである。

くずの語源

葛は正しくは『くずかづら』と呼ぶべく『まくず』ともいふ、漢名では葛の外に、絺綌草葛穀などといふ、その『くず』と讀む語源に就いては、『古今要覽稿』に

按にくずの名義詳ならず、源君美の說に葛讀でくずといふは細屑の義にて、其根を粉となし啜ふによりて此名ありといひたれども、屑はくづの假字にて葛はくずのかななればこの說うけがたし、岡村尙謙曰くくずはいづれにも此根を粉とせしもの、名にて其もとは草の名にては有べからず、今も大和の吉野よりいづるものその名殊に高しよつて考ふるに古、此粉をはじめて造り出せしは蓋し吉野の國栖人の其土に產するかづらの根を取りてつくりしによりて直にその地名をもて遂に此粉の名とせしにてあるべし。

といふのが一番肯かれる。

葛と史實

葛のことの最も早く史實の上に現はれたのは、日本書紀顯宗天皇紀を以て最初とする。

白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物適會縮見屯倉首縱賞新室、以夜繼晝、爾乃弘計天皇、謂兄億計王曰、避亂於斯年踰數紀、顯名著貴方屬今宵、云々、天皇起自整衣帶、爲室壽。曰、築立稚室、葛根、築立柱者此家長、御心之鎭也、取擧棟梁者、此家長御心之林也、取置椽橑者此家長御心之齊也、取置蘆萑者、此家長御心之平也、取結繩葛者、此家長御壽之堅也。云々

とこれに依つて見れば、葛といふ植物が、その蔓の茂り榮ゆる處から、かうした祝の辭にまで用ゐられてゐたことがわかる。

歌謠最古の葛

更に歌謠に葛の現はれた、最古のものとしては、同じ日本書紀天智天皇紀に左の如き記事があり、一首の童謠を記してゐる、曰く

天智天皇十年十二月癸亥、朔乙丑、天皇崩于近江宮、癸酉殯于新宮、于時童謠曰
阿箇悟馬能、以喩企波々箇屢、麻矩儒播羅、奈爾能都底擧騰、多把尼之曳雞武。

と、これは悲しみにたへかねて、眞葛原を馬も行きはばかるといふ意味である。

葛の葉裏見

葛の葉裏見といふ詞がある、此の葉風に飜つてよく葉裏を見せるといふことから來てゐる、『和漢三才圖會』に依ると

按ずるに葛蔓は、長きもの二三丈、其葉しなへて薄く、微かに楮葉に似たり、而して

面青く、背白く風至れば則ち能く飜へりて恰も掌を反す如く、婆娑として聲を作す、故に歌人葛の葉裏見と稱し、人を恨むに譬ふ、其蔓青黑色、微毛あり、强靱にして截斷すべからず、本草綱目に紫色と謂ふも、枯舊の色なり、以て器物を縛するに堪ふ。

と新古今和歌集中納言家持の歌に曰く

神なひの三室の山の葛かづらうら吹きかへす秋は來にけり。

忍びて這ふ戀心

葛の根の這ひもとほり、蔓の忍びて這ふといふ處から、戀ひ心に譬へられてゐるのも興がある、後拾遺和歌集第十三の戀歌に『あひそめて又と逢ひ侍らざりける女につかはしける』と題して叡覺法師の歌

秋風になひきながらも葛の葉のうらめしくのみなどかみゆらん

又、新古今十三卷の、相模が『人しれず忍ける事をふみなどちらすと聞ける人につかはしける』と題し

いかにせん葛のうら吹く秋風に下葉の露のかくれなきみを

とあるのもそれである。

詩經の葛

支邦の詩文では、詩經卷一國風周南に、葛覃三章、章六句があり、此の外にも葛はよく現はれて來るが、葛覃三章を引く

葛之覃兮、施于中谷、維葉萋々、黃鳥于飛、集于灌木、其鳴喈々
葛之覃兮、施于中谷、維葉莫々、是刈是護、爲絺爲綌、服之無斁
言告師氏、言告言歸、薄汙我私、薄澣我衣、害澣害否、歸寧父母。

葛を后妃にたとへて、覃びて谷にうつり、その萋々として美しく、黃鳥は灌木にとまつてその鳴くや和やかである、葛は延びて葉も榮える、これを刈りこれを煮て服とする、これは皆師の言を信じてこれにいそしむといふ意味にとれる。

戲曲の『葛の葉』

劇の『葛の葉』は、外題『蘆屋道滿大內鑑』である、竹田出雲の作で、享保十九年大阪竹本座に上演されたもの、大和葛城山に住む獵師が篠田の森を通りかゝると、一匹の牝狐が背を射貫かれた牡狐の死骸にすがつて悲んでゐる、獵師も憐れを催うして、その牡狐を懇ろに葬つてやると、二三日して見知らぬ女が來て、親切に獵師の世話などする、遂に同棲して子までなしたが、故あつて其家を去らねばならず、『戀しくば尋ね來て見よ出水なる篠田の森のうらみ葛の葉』の一首を遺して去つてしまつた、獵師が篠田の森に尋ねついた時そこには一匹の牝狐が舌を嚙み切つて死んでゐた。

この傳說を骨子として、天文博士賀茂保憲の遺書玉兎集を高弟蘆屋道滿と阿部保名が爭ふことになる、保名には戀人榊の前があつたが自害したので保名は狂亂の身となる、これが淸元の『保名』で、保名はかねて、榊の前の妹葛の葉と共に一匹の白狐の追はれて來たのを助けたことがあるので、その白狐が葛の葉となつて保名と契る、これで二人葛の葉となる保名は眞實の葛の葉と思ひ子までなしたがそこへ實の葛の葉が尋ねて來るので、其身の本性の露はれるのを嘆き、恩愛の絆にひかれつゝも、信田の森にかへつて行く、これが梗概で、曾て山川秀峰氏が『安部野』と題してこれを畫いたことがある。

瞿麥　なでしこ

瞿麥（なでしこ）は俗に撫子の文字を充てゝゐる、石竹科の多年生草木で、よく人々にも知られ、種類も多くあるが、山上憶良が七草の中に數へたのは、河原なでしこ、一名やまとなでしこと稱するもの、山野に自生し、殊に河原などに多いので此の名がある、莖の高さは一二尺葉は細く線狀で節から發生する、花は五瓣で普通は淡紅色で、花瓣の先が深く裂けて絲の如く、萼は筒形となり、花後に實を結ぶ、莖にも葉にも、絲の上にやゝ白味を帶びてゐるのが特長で、此の花がそよ風吹く河原に咲いてゐる姿は實に優雅なもので、古の詩人が多く吟詠に上したのも故なきことではない。

麥に似た實

順序として名稱や語源を一應調べて見る、瞿麥は、別に石竹といひ、常夏、日暮し草、なつかし草、石のたけ、かたみぐさ、茶筌花などといひ、支那では、瞿麥、石竹の外に、巨句麥、句麥、南天竺草、天南竹、石菊などといふ、日本には昔から各所に自生したもので、その瞿麥といふのは、『圖經本草』に

七月結實、作穗子頗似麥、故以名之

と、その實が麥に似てゐるからといふ、又、石竹といふのは、『本草綱目』に

石竹、葉似地膚葉而尖小、又似初生小竹葉

とあるのから來てゐる、

石竹の傳說

此の石竹といふ名については、なほ一つの傳說がある、それは『漢汐草』に載せられた、

から國にありけることはいざしらずあづまのおくにおふるいしたけ

此の歌の心は、むかしある國に鳥田の時主といふ勇士あり、わが家のうしろの山に一つの石あり、かの石、石れいあつて人をなやます、仍時主くだんの石を射る、卽ち矢たちぬ、矢ぬけずして花さきぬ、この花なでしこなり。

と、聊か牽强附會らしいが、載せて置く。

なでしこの名

『なでしこ』といふ語源は、『言海』に、家經朝臣和歌序を引いて

鍾愛抽叢草、故曰撫子、艷狀共千年故曰常夏

とあるのが正しく、『菜華抄』には

撫子とは花の形ちいさやかに其色愛すべきを以て名づく、常夏とは其花春より秋までさかり久しく咲き續く故に名づく

とあるのも同じ意味である。

瞿麥の種類

瞿麥には多くの種類がある、法橋保國の『野山草』の說を引く。

紫一重、きれあるを駿河といふ、淡紅千重撫子と云ふもあり、白一重大輪きれ深きを大鷲といふ、同く中輪を小鷲と云ふ、少しうつりあり、八重を朝鮮唉と云ひ、紅一重を南京といふ、これに八重あり、又濃紅きれ少きをごすでといふ、花に一重八重あり、白に紅絞を駒錦と云ふ、是に似て絞よくきれ深きを駒留といふ、地白に藤紅七子絞り千重を朝霧といふ、白一重中輪切れ深きを

白絲といふ、又白絲といふに白百重きれよく中輪あり、雪白青味あり、牡丹唉を淺間といふ、又瀧の白絲と云ふ、紅十重中牡丹唉を花がらみといふ、白至極大輪を卷龍といふ、千重大唉を雪富士といふ、紫紅千重牡丹唉を武藏野といふ、又是より立よき牡丹唉あり、唐の頭といふ、藤紫八重大輪切れしごくよきを花鳥山といふ其外珍らしき撫子一重八重十重百重千重數百種あり筆につくし難く又撫子にて撫子を離れし者ありといふ、舶來のものでは、阿蘭陀石竹、朝鮮瞿麥、共に後光明天皇の寬文年中に渡つたこと、『廣益地錦抄』にあり、唐撫子は藤原時代には既に日本に來てゐたこと、『枕草子』に、清少納言が、『からのは更なり』云々と記してゐるのでも知られる。

カーネーションは、歐洲の原產で、河原撫子のやうな清楚な處はなく、花瓣が複雜してゐるが、香氣が高いので麝香撫子の名で呼ばれてゐる、明治の初年の渡來らしく、阿蘭陀石竹、アンジャベルと呼ばれたこともある。

アメリカ撫子は、矢張歐洲の原產であるが米國を經て渡來したので、此の名があるといふ、花は小輪で天鵞絨のやうに花瓣が厚く光澤があり、莖の先に多數集まつて唉く。花色はいろ〳〵である。

蟲取撫子は矢張舶來撫子の一種で、花の色は淡紅或は白色、花がグッと小さく、撫子といふ感じから大分遠くなつてゐる。

本邦產の瞿麥の中では、伊勢瞿麥が花も美しく品位があり、色も種々あつて園藝界に賞美されてゐる。

瞿麥の最古文獻

瞿麥のことが、日本の文獻に現はれた最初のものは、允恭天皇の御宇、初めて出雲の國に生ひ出でたといふ、『出雲風土記』である、その文に曰く

仁多郡風誌山所在草木云々、瞿麥升麻

それから『延喜式』に、

諸國進年料雜藥伊賀國二十三種云々連翹瞿麥各六斤

と、これは藥用に供されたものである、その藥用に供されるは花穗で、小便を利し、目を明かにすとある。

かたみぐさの由來

瞿麥の異名に『かたみぐさ』といふのがあるが、これに就いては、莫傳抄に左の物語を載せてゐる。

昔大和國に、人の子のなでしこつくりてけるが、其後死して親我が子のつくりたるなでしことて、是を申すなり

きて見ればなきより人はかたみぐさいくたびわれは袖ぬらすらん

とみえたり。

常夏といふこと

或書に瞿麥を常夏といふこと祐盛抄に、染殿の后、幼くおはしましける時みめかたち美しうおはしましければ、撫子と名づけたてまつりたり、その御名をさらむとて、常夏といひつたへたりとあり、今按に大鏡裏書云、染殿大后少之時、容姿艷麗號瞿麥御、取美艷、後改瞿麥稱常夏花、蓋辟諱也とあれば、祐盛抄もたがふまじくや、美艷にとりて瞿麥と稱したる事ながら、文字は撫子と書くべし、子の字貴婦人の通稱なるにとりて、幸に名付給ひたるなるべし。——釋慈延—隣女晤言——

女郎花をみなへし

女郎花はいにしへより女にたとへ我落にきと法師の破戒によめるは、女郎の二字になづめるならむか、初秋の風によろめきたてるも、菊にさきをかけられたらむは、手柄やすくなからんと、おもへる物ずきこそやさしけれ、此女郎花といへる物、花にしてはちと請取がたし、たとへば聲のうつくしきを選みて、小歌を習はせ、髪をおろして是を比丘尼とはいふ也、大卒は女色にしてかぎりなければ、大象をつなぐべき熱心のきづなもなし、さればとて男色のかたづまりたる類にもあらで、男女の中にたてる風俗也、此花百花に類する姿なし、古人蒸粟のごとしといへるは、草實のたぐひに比すべきか、莖も花も等しく黄にして下葉すくなによろめきたるは、彼比丘尼のたぐひとや見む。

——森川許六——百花譜——

女郎花の形態

女郎花は、女郎花科に屬する多年生草木で山野到る處に自生してゐる、莖の高さは三四尺位に達し、葉は對生して羽狀に裂け、花は黄色で極く小さく梢上に集まつて無數に咲くその一輪を取つて擴大鏡などで見ると、花冠は五裂し四本の雄蕋と一本の雌蕋がある、そして花が濟むと團扇形した小さい果實を結ぶその一種に**をとこへし**がある、同じく山野に自生し、多年生草木で、形態はほゞ女郎花に似てゐるが、花の白色の點が異つてゐる、更に一種**はるをみなへし**がある、一名**かのこさう**と呼び、花が淡紅色であることと、花冠に三雄蕋ある點が異なる、**はくさんをみなへし**は加賀の白山に多い處から此の名があり、高山植物としてよく知られてゐる。

女郎花の名稱

女郎花（をみなへし）は、をみなめしとも呼び、古くこれに漢字の姫坤、又、娘子部四、娘部思、美人部師などを充て、ちめくさの名もある、漢名には敗醬、鹿腸、馬草、澤敗、地花菜、更に蒸粟の名もあり、方言では奈良のこのてがしは、信濃及び土佐にてはとちな、伊勢ではみるななどと呼ぶ、その**をみなへし**の名はをみなは女で、へしはなるべしの意といひ、女の妖艶なるを象徴しての名といふ、敗醬の名は『大和本草』に

敗醬と名づけしは此花葉の臭、醬の損じたるが如し

とあるので知られるし、澤敗の名なども同じやうな意味であらう。

蒸粟の名

『蒸粟』は花の形から來てゐること勿論であるが、釋慈延の『隣女晤言』に言ふ

朗詠女郎花に源順の句に花色如蒸粟、俗呼爲女郎とあるより後の歌にも

玉だれのこすの大野のをみなへしたか蒔く粟の色に咲くらん

などよめり、此の蒸粟の字、もじは文選の蒸粟の字を順の見あやまりて作れるか、魏文帝與鐘大理書云、玉白如截肪、黑譬純漆赤擬雞冠、黄侔蒸粟とあり、まことに栗の佳なるものは、蒸す時は色黄にしてつやや

かなり、もし文選の古本に蒸栗とありしにや、粟ならばむさずとも黄なるべし、蒸の字をそふるはいやしく聞ゆ、後に基俊の悅目鈔を見れば、此順の句の本文に文帝の書をひきて、黄侔蒸粟とのせたり、しかればいよ〳〵古の本には粟の字に作りたりと見ゆ、此女郎花漢名敗醬といふ、本草綱目にのする處、蘇恭が說は花黄なりといふ、時珍が說ははな白しといへり、此のしろきをば俗にをとこへしといへり、靈鬼志曰、何文は漢人也、有一女子、容顏美卒死葬、明日見其塚盡成菊華故名菊花女、亦名女郎花とあるは、菊の事を女郎花ともいふと見えたり。

朗詠集の詩句

その『和漢朗詠集』秋の部には、特に此の花の詩句三四を記載してゐる。左の通り。

花色如蒸栗、俗呼爲女郎、聞名戲欲契偕老、恐惡衰翁首似霜。　順

をみなへしおほかるのべにやとりせばあやなくあだの名をやたつべき　野美材

をみなへしみるにこゝろはなくさまでいとゞむかしのあきぞ戀しき　清愼公

古文獻二三

本草綱目云、敗醬處々原野有之、俗名苦菜、野人食之、江東人每采收儲焉、春初生苗、冬始凋、初時葉布地生、似菘菜葉而狹長、有鋸齒、綠色面深背淺、夏秋莖高二三尺而柔弱數寸、一節々間生葉、四散如繖、顚頭項開白花、成簇如芹花蛇牀子花狀、結小實成簇其根白紫頗似柴胡、吳普言其根似桔梗、陳自明言其根似蛇苺者皆不然。

救荒本草云、地花菜、又名墓頭灰、生密縣山野中、苗高尺餘、葉似野菊花葉、而窄細又似鼠尾草、葉亦瘦細梢葉間開五辨小黄花、其葉味微苦、救飢採葉熟水浸淘洗淨油鹽調食。

本草圖經云、敗醬今江東亦有之、多生崗嶺間葉似水莨及薇銜、叢生花黄根紫色、似柴胡、作陳敗豆醬氣、故以爲名、八月採根暴乾用。

菅家萬葉集より

白露の置けるあしたのをみなへし花にも葉にも玉ぞかゝれる

孔子仁恩郁山野、白露晨々晞玉裳、

山人洪勢併林樹、晴霧暮々懸羽衣。

草がくれ秋過ぎぬれどをみなへし匂ふゆゑにぞ人に見えぬれ

女郎何葉節草隱、候周忘秋袖匂

終日秋野收黄色、通夕露孕染花貌。

君に見えんことやゆゝしきをみなへし霧のまがきにたちかくるらん

女芝露孕祕籬前、江公染保翳佗敷

秋風吹來將挑却、可惜草木旦濫落。

をみなへしうつれる秋のほどを見て根さへうつりて露ぞ折りつる

芽花與女郎交袂、烟霞相催草本宜

天却秋山埜何怜、風露染手秋斷腸。

秋ごとに折ゆくらめどをみなへし昔をまつの名にこさりけれ

每秋往良芝良折、當日相對猶不古

藝能敢取丹名禮、每秋往良芝良折。

秋風に吹き過ぎて來るをみなへし目には見えねど風のしきれる

秋風觸處露不閑、吹道浪花岸前發、

竹葉隱低自引盃、相說黎氏女宴盛。

——女郎花歌二十五首の中——

藤袴　ふぢばかま

憶良が七草の第六に數へられた藤袴は、菊科に屬する多年生草本で、高さ四五尺位になる、元來原野河畔等に多いのであるが、今日は庭園にもよくこれを見る、葉は對生であるが三つに裂け、莖は圓く、葉は上に行くに從つて小さく、最上の葉は裂けてゐない、細かい鋸齒があり、これを乾燥すると一寸した香氣を發する、花は淡紫色をした管狀花で、多く集まつて咲く、そこに此の草の特長がある到る處の山野に自生してゐるのでよく知られてゐる、その形態に似てゐるのが左の二種である。

よつばひよどり　深山に生ずる、藤袴によく似てゐるが、花は藤袴より密生し、一ところから四枚の葉が出るので此の名がある。

ひよどりばな　これも大體藤袴に似てゐるのであるが、莖も葉も疎で、葉は三裂せず、普通の對生、白色の花もあり淡紫色もある。ともに、鵯の來て鳴く頃から咲き出すといふ意味から名付けられてゐる。

藤袴の名稱語原

此の花の名の藤袴とは如何なる意か、言海に依ると

花の色藤の如く、瓣の筩をなすこと袴の如き意なりと云ふ

とある、古人は此の小さい管狀花の一つを取つてかうした名をつけてゐる、如何に自然の觀察が行屆いてゐたかゞ知られる。

漢名は蘭で、『詩經』の鄭風に

溱與淆、方渙々兮、士與女方蕳

とある蕳がそれで、蕳は蘭の古字であるといひ、また、『易』の『繫辭傳』にある

同心之言、其臭如蘭

の蘭も、蘭科植物の蘭ではなくて、此の藤袴のことであるといふ、故に、昔は日本でも此の草を蘭から訛つて『らに』と呼んでゐたのであるが、『らん』は何時か春蘭や一莖九華等の蘭科の植物に奪はれてしまつたのである、なほ、異名としては、香蘭、王志香、國香、秋蘭、蘭澤、大澤蘭、香水蘭、蒸尾香、紫菊、孩兒菊などと夥しくある。

藤袴の名の古いことは、遠く奈良朝時代既に此の名があつたことでもよく知られる。

藤袴の傳說

花が可憐であるだけに、可憐な傳說がやはり此の花にまつはつてゐる、『榮雅抄』によると、昔、美しい上﨟があつて、常に藤の蔓を晒して織つた袴をはき、何時も物おもはしげに遠地近地とさまよふてゐたが、扨てその身の上を進んで聞かうとするものもなかつた、上﨟はかうして憂き年月を送つてゐたが、ついに浮世を儚なんで、道のべの露と消えてしまつた、人々あはれに思ひ、いと懇ろに野邊の送りを營んでやつた、幾程もなく墓から優しい花が萠え出した、その花の色は、上﨟がつねに身につけてゐた藤にゆかりの色であつた――といふのである。

史實の上に

藤袴のことが、史實に現はれたのは、『日本書紀』允恭天皇の條である、天皇の二年、春

三月、忍坂大中姫、入內して皇后とならせ給ふたが、まだ家に在すころ、母君に從ひ後苑の藤袴の咲く中を、そゞろありきして在したすると會々鬪雞國造（つゆのくにみやつこ）といふもの、館の前を馬に騎つて過ぎ、籬の中をのぞき込み、姫の姿を見、園を作るはおん身の業か、その草一枝折つて給はれといふ、姫は何にするぞと仰せられながら、一莖折つて與へると、國造は、馬の蟲を逐ふ爲めぞといひはなちつゝ一鞭あてゝ過ぎてしまつた。

その後、姫入內し皇后の位に卽かせられたので、國造を探さしめ、召出してその無禮を數へ、重き罪科に行はふとすると、國造は大に驚き、かゝる高貴の御方とは露知らず、無禮の段々、唯々懺愧の至り、救させ給へと、頭を地につけて恐入つたので、皇后これを宥し、その上稻置の姓を賜はつたとある、藤袴の花の美しさには關係はないが、史實丈けに興を惹く。

源氏物語藤袴の卷

文學の中では、源氏に藤袴の卷がある、光源氏三十七歲の時の物語で、夕霧宰相は中將となり、夕顏の娘玉鬘に文など送る、同じやうに玉鬘に文を送るものに、螢兵部卿や、髭黑の大將などがある、卷の名は

蘭（らに）の花のいとおもしろきをも給へりけるを御簾のつまよりさし入れて、これも御覽ずべきゆゑはありけりとて、頓にもゆるさでもたまへれば、うつたへに思ひもよらでとり給ふ、御袖を引きうごかしたり。

おなじ野の露にやつるゝ藤袴あはれはかけよかごとばかりも

から來てゐる、この場合、藤袴は藤衣、卽ち喪服の色や言葉にかよふ處から、こゝに表はされてゐるわけである。

朗詠集の藤袴

公任卿の『和漢朗詠集』には、蘭の題下に詩文四句と、素性法師の歌一首を載せてゐるのは、藤袴の文學としては見逃すことの出來ぬものであらう

前頭更有蕭條物、老菊衰蘭三兩叢。白扶桑豈無影乎、浮雲掩而忽昏、叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗。　菟裘賦中書王凝如漢女顏施粉、滴似鮫人眼泣珠。都曲驚楚容秋絃馥、夢斷蒸姫曉枕薰。直幹

◇

ぬししらぬかこそにほへれあきののにたがぬぎかけしふぢばかまそも　素性

百花譜の說

森川許六の百花譜は透徹した批評眼で、よく、花の特長を捉へ、皮肉な筆で品騰してゐるが、藤袴については、次のやうに記してゐる。

らにの花は蝶の羽に薰物すと、先師の腸より搜出し侍るこそ、其佳人の面影もなつかしければ、これに先をこされて、口を閉ていはず。

和漢三才圖會の說

寺島良安は『和漢三才圖會』濕草類中に、藤袴の一項を載せてゐるが、その說明も極めて簡單である。

按藤袴、高二三尺、葉似女郎花、葉面無切叉、六七月開細白花、似繡線花、此與磯邊草一類二種乎。

蘭、和名曰藤袴、和歌亦然、而此草呼同名何謂乎。

桔梗 ききやう

『萬葉集』の山上憶良の秋の七草の歌の中の『あさがほ』は桔梗であることは、概説の中にも記した通りで、この說に對する學者の研究や考證はいろ〳〵あるが、此處には、一番わかりよく書いてゐる、『新撰字鏡』の考證を抄錄する。

新撰字鏡の考證

按に桔梗は、その花、牽牛花と同じく朝まだきより咲きそめて、其色もまた、牽牛花と相似たるによりて名づく、又、千草の根ざしには本草圖經を引いて、桔梗夏開小花、紫碧色頗似牽牛花とみえ、また救荒本草にも頗る似牽牛花とありて、なほ證類本草にみえたる牽牛花の圖の桔梗に似たるなどをみれば、牽牛花の漢種は、今世に桔梗唉の牽牛花といへる種の牽牛花多くて、そのかみ始めて渡りこしも、このたくひにて桔梗にいとよく似たれば、あさがほの名はおひそめしなるべし。近く慶長のころ、牽牛花の漢種わたりこしも桔梗ざきなりしよしあるものに見えたりといへり、これもいとよき考へなれども、予はいづれにも桔梗を朝顔といひしは、牽牛花がもとにて、桔梗の花も、それに似たるによりて、また朝顔と名付しなるべしと思はる。

異名と別名

桔梗にもさま〴〵の異名や別名がある、漢名は、白藥、梗草、薺苨、利如、蘆茹、などで、白藥といふのは、藥用に供するその根の白い處から名づけられてゐる、和名は『岡とゞき』、『くはんさう』、『一重草』『ありのひぶき』などある、岡とゞきは、『とどき』といふもの沙參(しやじん)のことで、桔梗は沙參によく似てゐて、岡に多いから岡とゞきと呼ぶと、『ありのひぶき』は蟻の檜扇の略で、此の花の一種に扇桔梗といふものあり、そこで蟻のやうに小さい檜扇の意かといふが、これは やゝ附會のやうである、一重草といふのは、桔梗は多く單瓣であるから斯く名付けられたのであるが、園藝上では重瓣のものもある、元よりその清楚な感じは單瓣に如かない、『せいねい』といふのは近江の國あたりの方言であるが、これは『薺苨』といふ漢名の轉訛、信州地方で『くわんさう』といふのも、梗草の轉化といふ說が近いらしい、古歌では、桔梗の字音をそのまゝ、『きちかう』などと詠じてゐる。

桔梗の形態

桔梗は桔梗科に屬する多年生草本で、山野到る處に自生し、殊に東北地方のものは花が大輪で色も美しい、栽培植物として生花用として重んぜられ庭に植ゑても趣きがある、莖の高さ三四尺に達するものもあるが、普通は三尺以內が多く、葉は長卵形又は廣い披針形で、表は濃綠、裏はやゝ白味を帶び、下部の方は、一所から三葉が出てゐるが、上に行くに從ひ互生となり不規則になる、花は紫碧色を普通とし、鐘狀をなし、五裂してゐる、中には五つの雄蕊があり、花柱は頂が矢張五になつてゐて、自然の細かい巧みがこんな微細な方面にまで及んでゐる、花は單瓣紫碧色が

普通ではあるものゝ、白色のものもあれば、重瓣のものもある。

桔梗の種類

桔梗の名を冠するもので、同じ桔梗科に屬するものでは左の種類がある。

雛桔梗　暖地の山野に自生してゐる多年生草本で、高さ一尺內外葉細長く互生、夏から秋へかけて鐘狀五裂の小輪花を開く、花の色は、紫色である。

澤桔梗　これは濕地に多いことその名の示す通りであり、高さは三尺位にまで達し、葉は細長く互生、花は莖の上に總狀をなして花冠は脣形を呈す、秋日開き紫色で中々に可憐である。

岩桔梗　これは高山に生ずる極く小さい草で高さは漸く五六寸に過ぎない、葉は長楕圓形で下部密生し、上に行くに從つて疎となる、花は莖の上に一輪又は二三輪を生じ萼の緣に鋸齒のある處が普通の桔梗と違つてゐる、美しい花である。

千島桔梗　岩桔梗に一寸似てゐる高山植物であるが、千島から樺太北海道方面にもあるので、千島桔梗の名がある、桔梗のやうに鐘狀花で先が五裂してゐるが、あまり多く開かないで、花は下に向く性がある、色紫碧色を呈す。

普通桔梗の園藝的品種としては、扇桔梗、紋桔梗、南京桔梗などと呼んでゐるが、大同少異である。

桔梗の文學

桔梗はかうした美しい草であるが、文學上ではあまり惠まれてゐない、加藤千蔭は、此の花に對し

七草にもれしうらみやはれやらぬ霜のまがきのきちかうの花

と詠じてゐるが、これは憶良の七草の歌のあさがほを今の朝顏だと思つてのことで、既に七草の朝貌が桔梗とわかつて見れば、此の歌のやうな心配はいらなかつたのである、併しそれにしても、古歌に桔梗の歌は多くなく、古今集にも唯一首、散木集にも一首をのせたばかり、それも花の美しさを歌つたのではなく、きちかうといふ文字を弄んでゐるのに過ぎぬのである。—別項參照—

『枕草子』の『草の花は』の條にも、『女郎花、桔梗、菊のところ〴〵うつろひたる』と花の名を並べた中に、數へられて居るに過ぎず、兼好法師も、『庭にありたき木』の段に庭木や秋草の通を並べて、植物の趣味を書いてゐるがこれにも唯名を列ねられたばかり、唯俳家の文章の中で、森川許六の『百花譜』の中に

桔梗は其色に目をとられり、野草の中におもひもかけず咲き出でたるは、田家の草の戶によき娘見たる心地ぞする。

と書いてゐるのが、餘程同情のある見方をしてゐる。

桔梗の紋

桔梗の花を圖案化したものゝ中で、最も著しいのは紋どころである、先づ普通の單瓣花をそのまゝ正面から見たのを第一に、丸に桔梗、糸輪のぞき、ねぢ桔梗、三つ割桔梗、龍膽桔梗、桔梗菱などがある、桔梗を定紋としたので有名な人に加藤清正あり、明智光秀あり殊に明智光秀の桔梗は、戲曲の桔梗の旗擧などゝなつて人口に膾炙されてゐる、なほその名を冠するものに桔梗袋桔梗筮がある。

木芙蓉　ふよう

山上憶良の秋の七草以外で、逸することの出來ぬものは木芙蓉である、これは秋草の中に數へられてはゐるものゝ、草本ではなく、錦葵科に屬する落葉灌木である、『きはちす』と呼ぶ、元來支那の原産であるが、琉球、臺灣にも自生し、海濱などに多く繁殖する、臺灣內地に自生する木芙蓉は、殊に色彩が美しく、遙かに內地産を凌駕してゐることは、臺灣を旅行した人々の等しくいふ處である。

元來、單に芙蓉といふ時は、蓮をさしていふのであるから、本來木芙蓉と書かねばならぬのであるが、何時か木の字が略されて、芙蓉の名で呼ばれるやうになつた、これが爲め今日では、芙蓉の名が全く蓮とは緣が離れてしまつたわけで、それが爲め、蓮の芙蓉の文字を用ゐる時は、水芙蓉、又は草芙蓉と呼んで區別をするやうになつてしまつた。

芙蓉の形態

木芙蓉は灌木であるから、その莖は木質である、春の初め根株から芽を叢生し、灌木の狀態だから幾本となく生じ株を爲し、その高さ五六尺乃至七八尺に達し、葉を生ずる、冬になると枯れて根株ばかりが地上に殘るが、熱帶地方にゆくと、冬も枝や幹が枯れず、殆んど喬木のやうな形態になるものもある、葉は互生で掌狀を呈し、極く淺い刻み込みがあつて五裂又は三裂する、その裂けた尖端は鋭く、丁度パラソルを擴げたやうな形となる、葉には長い葉柄がある、秋になると、葉の腋から花梗が出て美しい花を開く、花は大形で直徑二三寸位あり、ほんのりと紅を含んだ嬌姿、たとふるに物なき位である、時に白花のものもあるがこれが亦清楚を極める、小苞がある、十箇になつて線形を呈し、短かい毛を生じて居り蔓にも矢張り短かい毛を生じ、裂片は尖端が非常に鋭い、花は花瓣が五枚で、その頭には不規則の刻み込みがあり、果實は蒴でやゝ球形を呈し、これにも鋭い毛が生じてゐる、此の樹の皮から蓑を製することも聞えてゐる。

本草綱目の說

本草綱目の中には木芙蓉を左の如く記してゐる。

木芙蓉、揷枝卽生、小木也、其幹叢生如箒高者丈許、其葉大如桐、有五尖及七尖者、冬凋夏繁、秋半好着花、花類牡丹芍藥、有紅、白者千葉、暑耐寒不凋、不結實、其皮爲索。

『添色拒霜花』木芙蓉之異種、四川廣川出、之其花部開時白色、次日稍紅、又明日深紅色先後相間如數色

『葉花』微辛、清肺涼血、散熱、解毒、一切癰疽惡瘡。

野山草の所說

芙蓉花、葉は桐に似たれども、のこぎりありて葉うすし、葉兩方へ一對大きく、くさ木の如く、又花はむくげに似たれども大きく、一重あり、八重あり、千重あり、色大白あり、大香あり、薄紅あり、しの立高さ一丈ばかりあるもあり、又一尺許りあるも花咲く、一尺ばかりある時は草立一丈ばかりあれば木立に成るなり、古枝より若ばへ出て牡丹に同じ。

芙蓉八九月內開、有拒霜名、一名木蓮一名木芙蕖、楚詞搴芙容於木末、有大紅粉紅白三色、又有醉芙蓉、一日之內花容三變、由白而淡紅、桃紅、丸子芙蓉一枝、土開花幾色、一本上有九色、魏文帝有芙蓉園、括異志有芙蓉館主芙蓉城。—法橋保園野山草。

芙蓉の傳說

蜀の孟俊主、成都城上あまねく芙蓉を栽ゑた、その長さ凡そ四十里、秋に至ると花開いて錦繡の如く高下相照す、よつて錦城と名づくと。

南紀田邊のことを錦城といふ、神島に芙蓉の大樹ありこれによつて此の名があるのであらう。　——南方熊楠——南方隨筆——

芙蓉の畫題

芙蓉は古來繪畫等に表現されたもの極めて多い、然して、此の花を中心として描かるゝ風物は何か、狩野一溪の『後素集』に載する處の畫題を左に引く。

芙蓉睡猫圖、芙蓉猿雀圖、芙蓉鳩子圖、芙蓉宿蛇圖、白桃芙蓉圖、白芙蓉圖、折枝芙蓉圖、並帶芙蓉圖。

以上八題を擧げてゐるが、此の中並帶芙蓉は蓮のことではあるまいか、他は木芙蓉なることと疑ひないが、これ丈けは蓮らしい。此の外の畫題としては

槃華萬年　木芙蓉と桂花とを描く、槃華は蓉華字音相通ず。

一路槃華　柳に翡翠、芙蓉と鷺である、此の芙蓉は元蓮らしいが、芙蓉が多く畫かれてゐるやうだ

六　妍　芍藥、海棠、梨花、木槿、月季、木芙蓉の六種を畫く。

九　秋　桂花、木芙蓉、秋海棠、紺菊紅蓼、剪秋羅、月草、瞿麥、雁來紅を畫く。

なほ宋程棨の三柳軒雜識には三十客を選んでゐるが、木芙蓉は『醉客』に充てられてゐる、花の色、ほのかに紅を帶ぶる處を、微醺にたとへたのであらう。

平家物語の芙蓉

『平家物語』第三卷に建禮門院の御懷妊を記したる中に

かゝりし程に、中宮御月の重るに隨ひて御身を苦うせさせ給ふ、一度笑めば百の媚ありけん漢の李夫人、昭陽殿の藤の床もかくやと覺え、唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨を帶び、芙蓉の風にしをれ、女郎花の露の重げなるよりも、猶痛はしき御樣なり。

とある、『芙蓉の風にしをれ』とあるので、建禮門院の姿が目に見えるやうである。

牧溪の名畫

芙蓉の作といへば、直ぐ牧溪の筆で、京都總見院の名作が擧げられる、總見院は信長が本能寺の變に死したので、秀吉が信長追善のために建てたので、秀吉が此の名作を同寺に寄進したものといひ。

昨日被仰出候ふよう御繪被進之候一段見事樣子別而御祕藏尤奉存候就裡々可申上候此等之趣宣預御披露候　　恐々謹言

七月十日　　拋筌齋宗易花押

球首座

といふ添文もある、雨中の芙蓉なので、『雨花圖』と呼ばれてゐたといふ。

龍膽　りんだう

龍膽は、龍膽科といふ一科を爲す多年生の草本で、山野到る處に自生してゐる、根は鬚狀を爲し、莖は直立し高さ二尺位になるが、地を這ふやうな性がある、葉は披針形で末が尖り、全邊で葉柄がなく直ちに莖についてゐる、一寸形が筌の葉のやうで對生し、花は梢頭に集まつて咲く、鐘狀で、先が五つに裂け更に裂けた間々に小さい裂片を生じてゐる、色は紫で、秋日咲き、花中に五雄蕊と一雌蕊とがある。

龍膽の種類

龍膽科に屬するものでは、當藥龍膽、蔓龍膽、苦龍膽、お山龍膽などがある、當藥龍膽は高山に自生するもので、莖の高さ五六寸から一尺位になる、花は淡黄白色で絲色の細かい斑點があり、その名の如く藥用に供せらる、蔓龍膽は矢張り山地や陰地に多く自生し、莖は地を這ひ、物に絡はる性がある、秋、淡紫色の花を開く、お山龍膽は、北地の高山に自生する、高さ一尺から一尺五六寸に達し、花は鐘狀で先づ五裂し秋日藍紫色の花を開くが普通の龍膽ほど多くない、苦龍膽は極く小さい草で春小花を開く淡紫色の可憐なもので、莖も葉に總て小さく、これに似たものに筆龍膽がある。

龍膽の名稱

龍膽、一名陵游、和名は『にがな』『えやみぐさ』など、呼ばれてゐる、龍膽といふのは、本草綱目に依ると『味苦如膽因以名龍膽』といふ、卽ち根が非常に苦いので此の名があり、それが胃腸の働きを助けるので、藥用となる處から『えやみぐさ』といひ、味の上から『にがな』の名稱があるのである。

龍膽の傳說

龍膽の傳說としては『日光御靈山緣起祕錄』に左の一話がある。

日光の奥白根に近い澤邊に、或る時一匹の白兎が現はれて頻りに草の根を掘つて嘗めてゐる、役の小角が丁度その傍を過ぎて之を眺め、兎にそのわけを訊ねた、兎が答へて謂ふのには、我が老眞人病篤く僕に命じて藥草を二荒山中に探し求めよといふ、今嘗めてゐるのがその藥で、調腹の妙此の草に勝るものはないと、やがてその根を携へて忽ち白雲を掻き分けて天に昇つてしまつた小角これを異とし、自から其の根を掘り、甜めて試みると芳ばしい香氣があり、味苦くして口中にはかに清涼を覺えた、草は、その葉蘭に似て軟かく花は黄白色、鐘狀を呈する、則ちこれを山中の土民に教へたと。今の當藥龍膽がそれである。

枕草子に曰く

苅萱龍膽は、枝さしなども、むつかしげなれど、よの花みな霜がれはてたるにいと花やかなる色あひにてさきいでたる、いとをかし

と、花を見る眼が優れてゐる、和歌には極く少いが、和泉式部の作が有名である、曰く。

りうたんの花とも人を見てしかな枯れやははつる霜がくれつゝ

紫苑　しをん

紫苑は菊科に屬する大形の多年生草本で、高さ五六尺に達し、原野に自生するが庭園にも植ゑられる、日本ばかりでなく、支那にもシベリア地方にも分布してゐるが、日本で見るやうな美しさにはならぬといふ、葉は長橢圓形で互生し周緣に鋸齒があり、叢生して秋になると莖の上に淡紫色の花を無數に開くその高く秋風に搖れて、紫の花を動かす風情えもいはれぬものがある。

紫苑の雅名

紫苑は元來支那の稱呼で、いふまでもなく花の色彩から來てゐる名であるが、此の外に『夜牽牛』『返魂草』『青苑』の名があり、日本では、古く『乃之』と呼び『新撰字鏡』には『加乃木志太』の名があり、別に睡蓮と同じやうに『ひつじぐさ』の名もあるし、『ひめぎく』と呼ぶ處もある。

鬼のしこ草

中でも振つてゐるのは、『鬼のしこ草』といふ異名である、志許草と書くのを醜に充てたもので、此の出所は、『萬葉集』第四卷の大伴家持が、坂上大孃に贈つた歌二首の中に

わすれ草わがした紐をつけたれど鬼のしこぐさことにしありけり

及び、十二卷の

わすれ草垣もしみみに植ゑたれど鬼のしこぐさなほこひにけり

とあるのから來てゐる。此の鬼は紫苑の字音をそのまゝに『しをに』と呼んだのを、しの字が略されて『をに』だけが殘り、此の『をに』に『しこ草』がつけられたわけで、歌は菅草を歌つたもので、紫苑には緣もゆかりもなかつたのであるが、『しをにのしこぐさ』といふやうな類語から、此の草の別名になつてしまつたのである、こんな風であるから、古歌にも此の花の美しさを詠じたものは少く、『古今集』の

をにほひぞうつろひにけり

などといふやうに、徒らに名稱を弄んでゐるのに過ぎぬのである。

俳句の見方

併し俳句の方には、中々よい句がある、中でも乙二の句で、

大風の紫苑見てゐる垣根かな

は、雲足の早い秋の日の風の動きが、此の花を透してよく出てゐるし、杉長の

山雲や夜の紫苑に押しかゝる

も、低い雲と、丈の高い紫苑とも對照せしめて、何となく幽幻な趣きをとらへてゐる。

懷かしき紫苑の下の野菊哉

これは蕪村の句で、野菊が主となつてゐるがまた紫苑の趣きも出てゐる。

紫苑の名作

古畫にはあまり多く畫かれてゐないが、現代の作では、荒木十畝氏の『黄昏』が氏の作中でも傑作と稱せられて有名である、夕風にそよぐ紫苑の花はさびしく搖いで、下に一匹の猫が潛んでゐる、黄昏の情趣が如何にもよく現はれてゐる作である。

謡曲『女郎花』

亀阿彌作

此の作は戀の遺恨から身を投げた女の塚から女郎花の生ひ出でたといふ物語が骨子で出處は『撰集抄』に、『平城天皇の御時、少將頼風といふ人男山に住みけり、京の女と契りし後、彼女八幡へ尋ね行きて頼風がことを問ふ、家なるもの答へて曰く、此程はじめたる女房しますが、其所へ行き給ふと答ふ、此女うらめしく思ひて八幡の川の端に山吹重ねの衣ぬぎすて、身を投け死せりその衣朽ちて女郎花生ひ出でたるなり』とあるし、また『改暦雑事記』に『大同元年小野頼風妻化女郎花』とある、謡曲中でも名作であり、優艶と凄愴を兼ねた作である。

前シテ　老僧　後シテ　小野頼風
ツレ同妻　ワキ　九州の僧
處は山城

「是は九州松浦方より出でたる僧にて候ふ、我いまだ都を見ず候ふ程に、此秋思ひ立ち都に上り候ふ、「住み馴れし、松浦の里を立ち出でゝ、末不知火の筑紫潟、いつしか跡に遠ざかる、旅の道こそ遙かなれ、「急ぎ候ふ程に、是ははや津の國山崎とかや申し候ふ、向ひに拝まれさせ給ふは、石清水八幡宮にて御座候ふ、我國の宇佐の宮と御一體なれば、參らばやと思ひ候ふ、又是なる野邊に女郎花の今を盛と咲き亂れて候ふ、立ち寄り詠めばやと存じ候ふ。

「扨も男山籠の野邊に來て見れば、千草の花盛んにして、色を飾り露を含みて、蟲の音までも心有り顔なり、野草花を帶びて蜀錦を連ね、桂林雨を拂つて松風を調む「此男山の女郎花は、古歌にもよまれたる名草なり、是も一つは家づとなれば、花一本手折らんと、此女郎花の邊に立ち寄れば、「のう其花な折り給ひそ、花の色は蒸せる粟の如し、俗呼ばはつて女郎とす、戯むれに名を聞いてだに偕老を契るといへり、ましてや是は男山の、名を得て唉ける女郎花の、多かる花に取り分きてなど情なく手折り給ふ。あら心なの旅人やな「扨御身は如何なる人にてましませば、是程咲き亂れたる女郎花をば惜しみ給ふぞ、「惜しみ申すこそ理なれ、此野邊の花守にて候ふ。「たとひ花守にてもましませ、御覽候へ出家の身なれば、佛に手向けと思し召し、一本御ゆるし候へかし、「實に實に出家の御身なれば、佛に手向けと思ふべけれど、彼菅原の神木にも折らで手向けよと、其外古き歌にも、折り取らば手ぶさに穢る立てながら、三世の佛に花奉るなど、候へば、ことさら出家の御身にこそ、猶しも惜しみ給ふべけれ、「左樣に古き歌を引かば、何とて僧正遍昭は、名にめでて折れるばかりぞ女郎花とはよみ給ひけるぞ、「いやさればこそ我落ちにきと人に語るなと、深く忍ぶの摺衣の、女郎と契る草の枕を、ならべしまでは疑ひなければ、其御たとへを引き給はゞ、出家の身にては御誤り。「かやうに聞けば戯むれながら、色香にめづる花心、兎角申すによしぞなき、暇申して歸るとて、もと來し道に行き過ぐる、「あらやさしくも所の古歌をば知ろしめしたり、

女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば、「優しの旅人や、花は主ある女郎花、よし知る人の名にめでゝ、免し申すなり、一本折らせ給へや、なまめき立てる女郎花、うしろめたくや思ふらん、女郎と書ける花の名に、誰偕老を契りけん、彼邯鄲の假枕、夢は五十のあはれ世の、ためしもまことなるべしや。

「此野べの女郎花に詠め入りて、いまだ八幡宮に參らず候ふ、「此尉こそ唯今山上する者にて候へ、八幡への御道しるべ申し候ふべし此方へ御入り候へ、「聞きしに越えて貴く有り難かりける靈地かな、「山下の人家軒をならべ「和光の塵も濁り江の、河水に浮かむ鱗は、實にも生けるを放つかと、深き誓ひもあらたにて、恵みぞ繁き男山、榮行く道の有難さよ、「頃は八月半の日、神の御幸なる、御旅所を伏し拝み、久方の月のかつらの男山、さやけき影は所から、紅葉ばも照りそひて、日もかけろふの石清水、苔の衣も妙なりや、三つの袂に影うつる、しるしの箱を納むなる法の神宮寺、有り難かりし靈地かな、巌松聳つて山聳え、谷廻ぐりて諸木枝を連ねたり、鳩の嶺越し來て見れば、三千世界もよそならず、千里もおなじ月の夜の、朱の玉垣みとしろの、錦かけまくも、かたじけなしと伏し拝む。

「是こそ石清水八幡宮にて御座候へ、よくよく御拝み候へ、はや日の暮れて候へば、御暇申し候ふべし、「のう〳〵女郎花と申す事は此男山につきたる謂にて候ふか、「あら何ともなや、さきに女郎花の古歌を引いて、戯れを申し候ふも、徒事にて候ふ、女郎花と申すこそ、男山に付きたる謂にて候へ、又此山の麓に、男塚女塚とて候ふを見せ申し候ふべし、此方へ御入り候へ、是なるは男塚、又此方なるは女塚、此男塚女塚に付いて、女郎花の謂も候ふ、是は夫婦の人の土中にて候ふ。「扨其夫婦の人の國は何處、名字は如何なる人やらん、「女は都の人、男は此八幡山に、小野の頼風と申しゝ人、「恥づかしや、いにしへを語るもさすがなり、申さねば又亡き跡の、便りを思ひ頼風の、三つの袂に影うつる、しるしの箱を納むなる法の神宮寺、有り難かりし靈地かな、巌松聳つて山聳え、谷廻ぐりて諸木枝を連ねたり、鳩の嶺越し來て見れば、三千世界もよそならず、千里もおなじ月の夜の、朱の玉垣みとしろの、錦かけまくも、かたじけなしと伏し拝む。

「是こそ石清水八幡宮にて御座候へ、よくよく御拝み候へ、はや日の暮れて候へば、御暇申し候ふべし、「のう〳〵女郎花と申す事は此男山につきたる謂にて候ふか、「あら何ともなや、さきに女郎花の古歌を引いて、戯れを申し候ふも、徒事にて候ふ、女郎花と申すこそ、男山に付きたる謂にて候へ、又此山の麓に、男塚女塚とて候ふを見せ申し候ふべし、此方へ御入り候へ、是なるは男塚、又此方なるは女塚、此男塚女塚に付いて、女郎花の謂も候ふ、是は夫婦の人の土中にて候ふ。「扨其夫婦の人の國は何處、名字は如何なる人やらん、「女は都の人、男は此八幡山に、小野の頼風と申しゝ人、「恥づかしや、いにしへを語るもさすがなり、申さねば又亡き跡の、便りを思ひ頼風の、更け行く月に木隠れて、夢の如くに失せにけり。

「一夜伏す、男鹿の角の塚の草、陰より見えし亡魂を弔らふ法の聲立てゝ、南無幽靈出離生死頓生菩提。

「あら曠野人稀なり、我古墳ならで又何物ぞ「骸を爭ふ猛獸は、禁ずるにあたはず、「なつかしや、聞けば昔の秋の風、「うら紫の葛の葉の、「かへらば連れよ妹背の波、「消えにし魂の女郎花、花の夫婦は顯はれたり、あら有り難の御法やな。

「影の如くに亡魂の、顯はれ給ふ不思議さよ「妾は都に住みし者、彼頼風に契りを籠めしに、「少し契りのさはりある、人間をまことゝ思ひけるか、「女心のはかなさは、都を獨りあくがれ出でゝ、猶も恨みの思ひ深き、放生川に身を投ぐる、「頼風是を聞きつけて、驚きさわぎ行きみれば、あへなき死骸ばかりなり、「泣く〳〵死骸を取りあけて、此山本の土中にこめしに、「其墳より女郎花、一本生ひ出でたり、頼風心に思ふやう、扨は我妻の女郎花になりけるよと、猶花色もなつかしく、草の袂も我袖も露觸れそめて立ち寄れば

此花恨みたる氣色にて、夫の寄れば靡き退き又立ち退けば故の如し、「ここによつて貫之も、男山の昔を思つて、女郎花の一時を、くねると書きし水莖の跡の世までもなつかしや。

「賴風其時に、彼あはれさを思ひ取り、無慙やな我故に、よしなき水の泡と消えて、徒なる身となるも、ひとへに我科ぞかし、若かじうき世に住まぬまでと、同じ道にならんとて「つづいて此川に身を投けて、「ともに土中に籠めしより、女塚に對して、又男塚と申すなり、其塚は是れ主は我、幻ながら來りたり跡弔ひてたび給へ、「あら圖浮戀しや。

「邪淫の惡鬼は身を責めて、其念力の道も嶮しき、劍の山の上に戀しき、人は見えたりうれしやとて、行きのほれば、劍は身をとほし磐石は骨を碎く、こはそも如何に恐ろしや、劍の枝の撓むまで、いかなる罪のなれる果ぞや、よしなかりける花の一時を、くねる夢ぞ女郎花、露の臺や花の緣に、浮かめてたび給へ、罪を浮かめてたび給へ。

長唄『秋色種』

秋草の束の野邊の忍ぶ草、忍ぶ昔や古ぶりに住つく里は夏苧ひく、麻布の山の谷の戸に、朝夕向ふ月雪の、春告鳥のあと分けて艷めく萩が花摺の、衣かりがね聲をほに、あけておろして玉簾、端居の軒の庭籬、うけら紫、葛、尾花、共寢の夜半に荻の葉の風は吹くとも露をだに据じとちぎる女郎花其曉の手枕に、まつ蟲の音ぞたのしき、變態繽紛たり、神なり又神なり、新聲婉轉す夢は巫山の雲の曲、雪の曙雨の夜に、うつすや袖の蘭奢待、とめつ、うつしつ睦言もいつかしじまの兼ねてより、詞の眞砂岩越す浪に清掻く琴のつま調べ、うつし心の花の春、月の秋風時鳥、雪に消えせぬ樂しみは盡きせじ盡きじ千代八千代、常磐堅磐の松の色、いく十返りの花に歌はん。

あき草

秋は常さへ物淋しきに、思につれて亂るゝ心、露も淚も爭ひ兼て、戀の路の邊踏みわけがたき草の色にも染む身はつらい、ちらと見初めし、えいさん〳〵女郎花ゆゑ、拙き心か、のんさて、ここにはや、思ひ草身は朝顏の淺ましながら、せめて靡かんこともやありと、もみぢ重ねのそのうすえふに、書いてや送らん文見ぐさ、人目忍ぶの我がなみだには、乾く間もなき尾花が袖も引かばなびきやれ、さりとては、葛のうらみの數つもり來て、いつかは君をまた宮城野の萩の下葉の露にしつぽと濡れて、何ともなう、荻吹く風の便りを、聞くやと待ちし戀ごゝろ、亂れみだるゝ難波の蘆の契りはつらい、浪のよる〳〵、さんさみをつくし思ふはくださうな。—松の葉二卷—

尾花の露

誰を招くかまねくか誰れを、尾花の露のはら〳〵と、風になるこの切戸口

—端唄—

◇

ずんと秋風の立たぬ間に靡かさんせ女郎花おさしあひは、ござんせぬかいの、ちよつとかるかや

—こひぐさ—

秋草の名作

◇尾形光琳筆草花屏風　牧田環氏藏
中央に尾花、萩、野菊、桔梗、額を畫く。

◇同　四季草花繪卷　津輕伯爵家藏
秋草は菊、萩、黃蜀葵、芙蓉を畫く。

◇抱一草花繪卷　東京帝室博物館藏
鐵線蔦などあり。

◇南岳草花繪卷　東京美術學校藏
女郎花、薄、秋海棠、桔梗、野菊あり。

◇傳山樂松に秋草襖繪　京都智積院藏
床の間の襖繪で松下に白芙蓉を畫き一面には木槿を畫く、國寶。

◇乾山草籠圖　原富太郎氏藏
草花籠には紫白の桔梗と女郎花、次の籠には野菊、下の籠には尾花が入つて傾いてゐる、讃に曰く、『花といへば千種ながらにあたならぬ色香にうつす野邊の露かな』と乾山の代表的傑作。

◇鳥羽僧正鳥獸戲卷　高山寺藏
鳥獸戲卷は動物が主であるが、隨所に畫かれてゐる秋草の自由なる線は驚嘆に値するものがある。

◇傳永德秋草圖　京都壽聖院藏
垣には葛や這ひかゝり、菊がのぞき藤袴が亂れてゐる、構圖流石に興趣に充てゐる。

◇無款秋野圖　後藤新太郎氏藏
筆者は不明であるが桃山期に於ける狩野派の名手である、薄・紫苑・萩などが、優雅なる筆を以て畫かれてゐる。

◇傳相阿彌繪屏風　京都銀閣寺藏
葦の屏風と一双をなしてゐる、全面に薄を配したのであるが、扶置よく整ひ、秋風のわたるを覺える。

◇友雪筆秋草圖　京都西本願寺藏
海北友松の子友雪の筆、萩や朝顏の秋草を美しく畫いてゐる。

◇牧谿筆芙蓉圖　京都總見院藏
豐太閤が信長追悼のため總見院に寄進したものといふ、水墨で芙蓉一もとを畫いた素晴しい名作である。

◇尚信筆白芙蓉圖　東京帝室博物館藏
簡粗な筆で白芙蓉を畫き尾花を配したものであるが、筆致極めて高雅、略筆の妙もこゝに至ると神品である。

◇立林河帛草　秋草圖　東京美術學校藏

◇抱一筆月下秋草圖　毛利子爵舊藏

◇應擧筆武藏野圖　藤田男爵舊藏

◇光起筆秋野鶉圖　東京帝室博物館藏
草は菊に龍膽が畫かれてゐる。

◇狩野芳崖秋草鶉圖　雅邦集所載

◇乾山作桔梗透鉢　福田山王莊舊藏
乾山が獨自の手法になつた透し鉢で、秋草の工藝製作品中、稀に見るの逸品。

◇俊成連歌百首の箱　吉田楓軒氏舊藏
箱蓋に桔梗のみだれ畫き、楚々として人に迫るものがある。

◇道甫作籬秋草硯箱　說田鶴翁舊藏
蒔繪ものゝ中には、秋草を扱つたもの少くないが、此の作の如きは最も整つたもの。

◇政誠作硯箱見返研出秋草蒔繪　川崎家藏品
見政誠は享保年間京都の蒔繪師で、研ぎ出し蒔繪の名匠、蓋は地黑菊蒔繪である。

萬葉集の秋草の歌

秋草

秋の野に咲きたる花を指折りかき數ふれば七種の花（八卷）　山上　憶良

萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝顔の花（同）　同

神さぶと不許にはあらず秋草の結びし紐を解くは悲しも（同）　石川賀係女郎

歸り來て見むと思ひしわが宿の秋萩薄散りにけむかも（十五卷）　秦田　麿

をとめらが玉裳裾ひく此の庭に風秋吹きて花は散りつゝ（二十卷）　安宿　王

秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも（同）　大伴　家持

萩

引馬野ににほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに（一卷）　長奥麻呂

思ふ子が衣摺らむに匂ひこせ島の榛原秋立たずとも（十卷）　作者未詳

秋萩は咲きぬべからし吾が屋戸の淺茅が花の散りぬる見れば（八卷）　穗積　皇子

草枕旅行く人も行き觸らばにほひぬべくも咲ける萩かも（八卷）　笠金村

伊香山野邊に咲きたる萩見れば君が家なる尾花し念ほゆ（同）　同

我が岳の秋萩の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも（同）　大伴　旅人

明日香河行き回む岳の秋萩は今日ふる雨に散りか過なむ（八卷）　丹比　國人

鶉鳴く古りにし鄕の秋萩を思ふ人どち相見つるかも（八卷）　沙彌　尼等

吾が屋戸の一むら萩を念ふ子に見せずほとほと散らしつるかも（同）　大伴　家持

吾が待ちし秋萩咲きぬ今ぞにも染ひに行かな遠方人に（十卷）　柿本　人麿

夕ざれば野邊の秋萩うら若み落に枯れつゝ秋待ち難し（同）　作者不詳

眞葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩が花散る（同）　同

奥山に住むとふ鹿の初夜さらず妻問ふ萩の散らまく惜しも（同）　作者未詳

秋風は冷しくなりぬ馬並めていざ見に行かな萩が花見に（同）　同

白露に爭ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な零りそね（同）　同

秋の野をにほはす萩は咲けれども見るしるしなし旅にしあれは（十五卷）　遣新羅使人

薄　尾花

めづらしき君が家なるはな芒穗に出づる秋の過ぐらく惜しも（八卷）　石川　廣成

秋の野の草花が末をおしなべて來しくもしるし逢へる君かも（八卷）　阿野　蟲麿

人皆は萩を秋といふよし吾は尾花が末を秋とは言はむ（十卷）　作者未詳

秋の野の尾花が末の生ひ靡き心は妹に依りにけるかも（同）　柿本　人麿

さを鹿の入野のすゝき初尾花いづれの時か妹が手まかむ（同）　作者未詳

吾妹子の相坂山にはたすゝき穗には咲き出ず戀ひわたるかも（同）　作者未詳

秋萩の花野のすゝき穗には出でず吾が戀ひ

わたる隱妻はも（同）　同

はたすゝき穗には咲き出ぬ戀を吾はすむかぎるたゞ一目のみ見し人ゆえに（同）　同

葛

劍の後鞘に納野に葛引し吾妹眞袖もて著てむかも夏草苅るも（七卷）　柿本　人麿

雁がねの寒く鳴きしゆ水莖の岡の葛葉は色づきにけり（十卷）　作者未詳

我が屋戸の田葛葉日に日に色づきぬ來まさぬ君は何情ぞも（十卷）　作者未詳

水莖の岡のくず葉を吹きかへし面知る兒等が見えぬ頃かも（十二卷）　作者未詳

赤駒のい行き憚かるまくず原何のつてごと直にし吉けむ（同）　作者未詳

大崎の荒磯の渡り這ふ葛の行方も無くや戀ひわたりなむ（同）　同

瞿麥　なでしこ

吾が屋外に蒔きし瞿麥いつしかも花に咲きなむ比へつゝ見む（八卷）　大伴　家持

吾が屋前のなでしこの花盛なり手折りて一目見せむ見もがも（同）　同

射部立て跡見の岳邊の瞿麥の花總手折り吾は持去なむ寧樂人の爲（同）　紀鹿人

見渡せば向ひの野邊の石竹の散らまく惜くも雨な零りそね（十卷）　作者未詳

野邊見れば瞿麥の花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも（同）　同

一本のなでしこ植ゑしその心誰に見せむと思ひそめけむ（十八卷）　大伴　家持

なでしこが花見る毎にをとめ等がゑまひのにほひ思ほゆるかも（十八卷）　同

我が兄子が宿のなでしこ日並べて雨は降れども色も變らず（二十卷）　大原　今城

我が宿に咲けるなでしこ幣は爲むゆめ花散るないやをちに咲け（二十卷）　丹比　國人

幣しつゝ君かおほせる瞿麥が花のみ訪はむ君ならなくに（同）　橘諸兄

なでしこが花取り持ちてうつらうつら見まくのほしき君にもあるかも（同）　船王

我が兄子が宿のなでしこ散らめやもいや初花に咲きは益すとも（同）　大伴　家持

愛はしみ我が思ふ君はなでしこが花に比へて見れど飽かぬかも（同）　同

女郎花

手に取れば袖さへ匂ふ女郎花この白露に散らまく惜くも（十卷）　作者未詳

秋の田の穗向見がてら我兄子がふさ手折りける女郎花かも（十七卷）　大伴　家持

吾が鄕に今咲く花のをみなへし堪へぬ情になほ戀ひにけり（十卷）　作者未詳

女郎花秋萩折れば玉梓の道行きづとと乞はむ兒の爲め（八卷）　石川　春夫

朝貌（桔梗）

展轉び戀は死ぬともいちじろく色には出でじあさがほの花（十卷）　作者未詳

言に出では云はゞゆゆしみ朝貌の穗には咲き出ぬ戀をするかも（同）　作者未詳

我が目妻人は放くれど朝貌の年さへこそと吾は放るがへ（十四卷）　作者未詳

朮　うけら

戀しけば袖も振らむを武藏野の朮が花の色に出なゆめ（十四卷）　作者未詳

いかにして戀ひばか妹に武藏野の朮が花の色に出ずあらむ（同）　作者未詳

我が背子を何どかもいはむ武藏野の朮が花の時無きものを（同）　作者未詳

秋草の和歌

萩

秋萩もいろつきぬればきりぎりすわかねぬことやよるはかなしき（古今）讀人しらず

夜を寒み衣かりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり（同）同

秋萩をいろどる風のふきぬれば人の心もうたがはれけり（後撰）讀人しらず

秋萩をいろどる風は吹ぬとも心はかれじ草葉ならねば（右返し後撰）在京　業平

行かへり折りてかざさん朝な〳〵鹿立ならす野邊の秋はぎ（後撰）つらゆき

我宿の庭の秋萩ちりぬめりのちみん人やくやしとおもはん（同）宗于　朝臣

露けくて我衣手はぬれぬとも折りてをゆかむ秋萩の花（拾遺）みつね

うつろはんことだにをしき秋萩に折ぬはかりも置ける露かな（同）伊勢

子萩原匂ふ盛は白露もいろ〳〵にこそ見えわたりけれ（金葉）僧正　行尊

秋風はいたくな吹きそ我宿のもとあらの小萩ちらまくも惜し（金槐）鎌倉右大臣

尾花

今よりは植てだに見じ花薄ほに出る秋はわびしかりけり（古今）平　貞久

秋の野のをばなにまじり咲く花の色にやこひんあふよしをなみ（同）讀人しらず

花薄ほにいでてこひはなををしみ下ゆふ紐のむすぼれつゝ（同）小野　春風

君が植し一むら薄蟲のねのしげき野べともなりにけるかな（同）御春　有助

ほには出ぬいかにかせまし花薄身を秋風に捨やはてつん（後撰）小野　道風

花薄すそともすれば秋風の吹くかとぞ聞くひとりぬるよは（同）在原　棟梁

忍ぶれば苦しかりけりしの薄秋のさかりに成やしなまし（拾遺）勝觀　法師

霜かれの冬野に立てる村薄ほのめかさはやいまはしもほには出ぬらん東路の岩田のをののしのゝを薄（金葉）藤原　伊家

行く人をまねくか野邊の花薄今夜もこゝに旅ねせよとや（同）平　忠盛

花すゝき招かばこゝにとまりなんいづれの野邊もつひのすみかぞ（詞花）源　親元

葛

千早ふる神のいかきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり（古今）貫　之

神なびの三室の山の葛がづらうら吹き返す秋は來にけり（新古今）中納言家持

水くきの岡の葛はもいろつきて今朝うら戀し秋の初風（同）顯昭　法師

いかにせん葛のうら吹く秋風に下葉の露のかくれなきみを（同）相　模

我せこをまつちの山の葛かづらたまさかにだに來るよしもがな（續古今）源　實朝

日にそへて霜かれゆけば葛のはの有りしばかりもえこそ恨ね（同）俊惠　法師

眞葛原下葉ばかりの秋ならば思ひ返して恨まざらまし（續拾遺）權大納言長雅

吹送る風のまゝなる葛のはのうらめつらしく秋は來にけり（玉葉）後一條入道

瞿麥

ちりをたに立てじとぞ思ふ唉しよりいもと我ぬる常夏の花（古今）みつね

我のみや哀と思はんきりぎりすなく夕かげの大和撫子（同）素性　法師

うすくこく垣ほに匂ふ撫子の花の色こそ露も置きける（詞花）藤原　經衡

種まきしわか撫子の花盛いく朝露のをきてみつらん（同）修理太夫顯季

見るになほ此世のものに覺えぬはから撫子の花にぞありける（千載）和泉　式部

白露の玉もてゆくにませのうちに光さへそふ床夏の花（新古今）高倉院御製

草枕たびねの程もいかならん宿をみをさし常夏の花（續後拾遺）藤原　俊成

常夏の花なかりせは山かつの垣ほを人はたづねさらまし（風雅）讀人しらず

ゆかしくば行きても見ませゆき島のいはほにおふる撫子の花（金槐）源　實朝

女郎花

やをとめの袖かとみゆるをみなへし君を祝ひてなてはじめけり（家集）伊勢

をみなへし朝おく露をおひにして結ぶたもとやしをれぬらん（家集）俊頼　朝臣

女郎花はなの下ひもうちとけてたれとふしみの野べにさくらん（續古今）藤原　道經

すかはらや伏見の野邊の女郎花それになれてか今朝は露けき（夫木）藤原　俊成

くらふ山ふもとの野べの女郎花露の下よりうつりつるかな（順家集）藤原　有忠

さる澤の池なのぞきそ女郎花むかしもさこそ身をば捨ける（歌枕）源　仲綱

いそのかみふるからをのゝ女郎花名はいにしへの姿なりけり（久安百首）前參議親隆

久かたの天の河原の女郎花今日のひとよや露はらふらん（夫木）藤原　家隆

女郎花おほのの原のゆふまぐれあやな名たてにやとやからまし（夫木）民部卿爲家

うきながらさてもある世を女郎花なとひとさきに露こぼるらん（百首）寂蓮　法師

尾上よりさわきて渡るをみなへしをはな通ふか風の招くか（加茂社百首）慈鎭　和尚

く秋は來にけり（玉葉）後一條入道

藤袴

やどりせし人のかたみか藤袴忘られがたき香ににほひつゝ（古今）貫　之

なに人か來てぬぎかけし藤袴來る秋ごとに野邊をにほはす（同）敏行　朝臣

ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野はたが脫ぎかけし藤袴ぞも（同）素性　法師

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく（同）在原　棟梁

藤ばかまきる人なみやたちながら時雨の雨にぬらし初つる（後撰）讀人　不知

藤袴はやほころびてにほひなむ秋のはつ風吹きたゝずとも（金葉）皇后宮美濃

佐保川の汀にさける藤袴浪のよりてやかけむとすらむ（同）源　忠季

かりに來る人もきよとや藤ばかま秋の野ごとに鹿のたつらむ（同）右兵衛督尹通

桔梗

あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉もいろかはりゆく（古今）とものり

あやまたぬ花の都をおのれからうきやうなりと思ひけるかな（散木）讀人　未詳

秋草の詩

木芙蓉　韓　愈

新開寒露叢、遠比水間紅、艷色寧相妬、
嘉名偶自同、採江官渡晩、寥木古祠空、
願得勤來看、無令便逐風。

同　申時行

群芳搖落後、秋色在林塘、艷態偏臨水、
幽姿獨拒霜、漢皐霞作佩、湘曲錦爲裳、
白首滄江上、相看醉夕陽。

桔梗　逸名

菜花種類不勝收、桔梗青藍濟九秋、
性味苦平能接引、疏通氣血一身周。

葛花　同

蔓葉萋々挂綠枝、薰風五月緩相吹、
女紅組務爲締綌、未識芳花消酒巵。

宣陽所居白蜀葵詠

簡諸公　捗元衡

冉々衆芳歇、亭々虛室前、敷榮時已背、
幽堂地宜偏、紅艷世方重、素華徒可憐、
何當君子顧、知不近喧妍。

蜀葵　徐　貢

劍門南面樹、移向會仙辛、錦水繞花艷、
岷山帶葉青、文君慚婉娩、神交讓娉婷、
爛漫紅兼紫、飄香入繡扉。

葵花　高　啓

艷發朱光裏、叢依綠陰邊、夕同山蕊落、
午並梅榴燃、幽馥流珍簟、鮮輝照藻筵、
群芳已謝賞、孤植轉成憐。

紅芙蓉　蒲道源

豐肌翦骨與秋宜、宿酒醋來不自持、
豈爲嚴霜成槁質、要憑初日發妍姿、
燕姬入畫猶嫌陋、蜀錦圍巢未足奇、
獨對芳叢寄幽興、子高眞見遇仙時。

玉簪花　劉　因

花中冰雪避秋陽、月底陰々鎖暗香、
玉瘦每憂和露滴、心情惟恨有絲長、
且留宛轉圍沈水、莫遣聯翩入粉囊、
只許幽人太相似、蒼苔疎雨北窓涼。

方廣德不信搔頭花底重、數莖秋濯露溶々、
腰憎荊玉生前折、影比崔郎月下逢、
摘去何人憐素腕、揷來見處映秋容、
薄愁莫減冰霜骨、十二金釵好向從。

秋草の名句

萩

萩咲かば鹿の代りに寢にゆかむ　來山
一つ家に遊女と寢たり萩と月　芭蕉
萩とも見えず露あり庭の萩　其角
萩の花こぼれて庭の更紗かな　北枝
くゞらせて色々にこそ萩の露　嵐雪
しげしげと目で物言ふや萩の露　丈草
黄昏や萩に鼬の高臺寺　蕪村
捨石に萩うつ萩の夕べかな　闌更
葉隱れに蟲籠見えけり庭の萩　几董

芒

吹くからに芒の露のこぼるゝよ　鬼貫
宿に見るもやはり武藏野の芒哉　素堂
白馬の尾髪吹きとるすゝき哉　芭蕉
穗にたたぬ芒生ひけり石の隈　去來
一雨のしめりわたらぬ芒かな　支考
見る人の目も細うなる芒かな　浪化
雉子の妻隱し置いたるすゝき哉　千代尼
葛の葉の赤い色紙を恨みかな　其角
海はあれど翁參りぬ葛の宿　支考
葛の葉のおもて作るに倣ふなよ　越人
天狗風殘らず葛の裏葉かな　蕪村
人目も草もしどろに葛の枯葉哉　曉臺
葛の葉も吹くや鳴子のうら表　召波
葛の葉を重ねて夢の古草子　成美

瞿麥

醉て寢むなでしこ唉ける石の上　芭蕉
撫子やそのかしこきに美しき　惟然
お地藏や花なでしこのまん中に　一茶
なでしこの露折れしたる河原哉　士朗
なでしこの節々にさす夕日かな　成美
撫子に白布さらす河原かな　素堂
撫子に秋やかよひて白みがち　芭蕉

女郎花

女郎花打てば扇のにほひかな　去來
西風の中に立ちけり女郎花　東山
身の上をたゞしほれけり女郎花　涼菟
女郎花野守が妻に睨まれん　也有
その葉さへ細きこゝろや女郎花　太祇
秋風もかつきてふせり女郎花　曉臺
女郎花都離れぬ名なりけり　士朗
こま〴〵と垣根結びて女郎花　巢兆
墓原や一人くねりの女郎花　一茶
夕暮や見すてて戻る女郎花　蒼虬

藤袴

何と世を捨ても果てずや藤袴　路通
白銀の日貫やさしや藤袴　珍碩
藤袴此夕暮のしめりかな　園女
うつろへる程似た花や藤ばかま　北枝
十德を着た花はなし藤袴　支考

桔梗

紫に見よや桔梗を手向草　几董
草知らず唉いて目立つる桔梗哉　杉風
花桔梗名のみの色も唉にけり　樗良
きり〳〵しやんとして唉く桔梗哉　一茶

木芙蓉

枝ぶりの日毎にかはる芙蓉かな　芭蕉
惜しむなよ芙蓉の濱の雨舍り　支考
立出でゝ芙蓉の凋む日に逢へり　白雄
月宵に芙蓉日に〳〵花の露　士朗

藝術資料 第一期 植物篇 第八册 要目

△菊

口繪

菊花襖繪（山樂）
菊襖繪（友雪）
秋草襖繪（寶鏡寺）
朝顏垣に菊（天球院）
一本菊（雪舟）
菊花流水（若冲）
菊花遊蝶（呂紀）
菊花圖（揮南田）
菊慈童（探幽）
菊花兎（光起）
盛上菊（光琳）
菊圖（乾山）
菊花圖（椿山）
墨菊（竹田）
菊令人壽（鐵齋）
花籠（友禪齋）
雁菊硯箱（乾山）
東山時代菊花流水硯箱
能樂菊慈童（寫眞）
大菊小菊（寫眞二面）
鎌倉八幡宮藏籬菊硯箱（扉）

本文

菊花概說
菊の來歷
菊花十題
菊の紋章
菊の模樣
菊の字義名稱
菊のきせ綿
葉月畫傳の菊譜
菊花二畫題
菊の名作
菊花の銘畫
菊花の銘題
謠曲（菊慈童）
戲曲の菊
菊花の詩
菊の名歌
俗曲の菊
菊の名句

後記

◆本資料も既に半ヶ年を無事に刊行し第七册の秋草號を御手許にお屆けする運びになりました、本册は秋草といふ概括的なものなので、どうしても多數を輯錄せねばならず、併し限りある紙數ですから萬葉集の憶良の七草を主とし、今までの形成を追つて編輯しました。

◆第六册蓮は意外の好評を博しました、これに勢を得て益々精進することに致します、なほ各方面から資料に對する賛辭を寄せられますが、京都の西山翠嶂畫伯からも

既往各種の貴著に對しても小生は竊かに敬意を表し居るもの丶一人に御座候も、最近御出版の藝術資料は期待に反せず汎く藝術家の趣味を豐富にするに足る絕好の參考資料として愛讀いたし居り申候

と一書を寄せられ、百萬の味方を得たる心地いたしました、なほ洋畫家の岡野榮氏も本資料を女子學習院に御紹介されました御厚意を深謝いたします。

◆次に編者も今回いろ／＼の都合で二十餘年間住み馴れました青山を引拂ひ左記へ轉居いたしました、同方面御通行の節は御立寄り下さい、新居は

世田谷區下馬町二ノ一一四八　金井紫雲

で、東横沿線「青山師範」驛を澁谷方面より右手に降車、勸業グラウンドの西約一丁半です。

藝術資料 第一期 第七册（毎月一回二十日發行）
會員外及分賣 定價 金壹圓貳拾錢 郵稅金六錢

會費	
三ヶ月	金參圓
六ヶ月	金六圓
一ヶ年	金拾貳圓
郵稅共	

會員規定
三ヶ月以上御拂込の方を會員と致します御申込は必ず前金に願ひます。振替口座東京四〇九四〇番か大阪二五八番芸艸堂宛何れか御利用のこと。爲替は受取局を無指定として、切手代用は必ず一割增の事既納會費は拂戻の請求に應ぜず。

昭和十一年九月十五日印刷
昭和十一年九月二十日發行

編輯者 東京市世田ヶ谷區下馬二ノ一一四八 金井紫雲
發行者 京都市中京區寺町二條南入 合名會社 芸艸堂出版部
印刷者 京都市下京區北小路新町西入 須磨勘兵衞
印刷所 京都市下京區西洞院七條南入 內外出版印刷株式會社

發行所 京都市中京區寺町二條南（電話上二一九〇番）（振替大阪二五八番）
東京市本郷區湯島一ノ一（電話下谷三六〇〇番）（振替東京四〇九四〇番）
合名會社 芸艸堂

出版界

紫雲

出版物は東京市世田ヶ谷區下馬町二ノ一一四八金井紫雲宛のこと、本欄で御紹介いたしました出版物は、芸艸堂で取次ぎます。

南禪寺藏 花鳥扇面畫集

京都南禪寺に藏せらる丶後陽成天皇御下賜と傳ふる八雙の扇面貼交屏風は、未だ多く知ることの出來なかつた足利藝術の一面を目のあたり見るを得る貴重なる資料として、既に識者の研究を俟ちつ丶あるもの、今回この八雙二百四十枚中より、着色花鳥山水人物の代表的作品、及び水墨花鳥七十五枚を選び、二十五枚宛を實物大原色版として刊行することとなり、今回第一輯を上梓した、天地一尺一寸五分、横一尺五寸七分の高雅なる裝幀で、南禪寺加藤至道老師の題字、天授庵藤田月洲師の題簽にて、源豐宗氏が解說を兼ねたる序文を揭げ、燦爛たる光輝を放つてゐる、先づ屏風全面の寫眞四雙を玻璃版として揭げ、次で原色版として

波地圓窓秋草双禽　白鷺　夏草
月下秋草　薔薇と大瑠璃
枇杷と栗鼠　波地葛屏風
秋草四十雀　飛泉游凫
秋草扇面散山水　萱草鶺鴒
櫻楓群禽　桐花鳳凰
秋草競姸　春秋花卉練鵲
秋郊鳴鹿　月下秋籬
牡丹睡猫　櫻花駿馬
松下群鶴　うばら垣
椿と鶉　牡丹に鶉
雪中双雀　秋草遊蝶蜻蛉
水墨栗柿

等で、各圖とも精緻なる印刷藝術殆んど原物を見るが如く、その波地圓窓秋草双禽や、牡丹に鶉や、秋草に十雀や殊に面白く、近來稀有の藝術大出版といふべきである、なほ別に每輯五葉袋入り頒布法も設けてある。（第一輯特價拾八圓、分賣一輯繼續會員參圓五拾錢）送料三十三錢

集成名畫調

嵐野秀聲著

集成名畫調とは、今日まで名に傳へらる丶各流各派の名畫の粹を取りこれを以て一圖に構成し新しき圖案模樣として獨自の生命を賦與せんと試みたるもの、筆者は翠嶂門下の逸才で、夙に此の方面の研究に沒頭し先づ桃山障屏畫に手をつけ、苦心經營第一輯を刊行した、第一圖探幽の老松に山樂の梅を加へ、二圖智積院の楓樹は宇治橋屏風を加へ絢爛無比の畫面を構成し、三圖には山雪の千鳥の屏風に青蓮院の濱松屏風の貝の吹寄せを加へ砂子金泥の贅を盡し、四圖は山樂の竹林睡虎に堺大安寺の元信の鶴を配し、五圖は天珠院の山樂の梅に椿と籬を加へて一圖を爲す等、一種の綜合藝術ながら、その配合には相應に苦心を重れ、效果を擧げてゐる、殊に此の試みをして效果的ならしめた點に於ては、木版藝術の技巧も重要な役目を努めてゐる、殊に籬の圖の柴垣に銀泥の隈をかけた技巧や、花籠の圖の木目の如き、更に驚くべきは、元信の豪宕なる筆致を寫した波濤の圖の裝幀の如き、最近の出版界に於ける驚異的存在といつてよい、染織界に於ての歡迎期すべきであらう、今後の大成を希望する。（特價拾四圓）送料四十五錢

千艸かゞみ

岡本東洋著

動植物の藝術寫眞で獨步の地位を占め一作出づるごとに歡迎を受けてゐる東洋氏の近業である、今回は從來の出版とは行き方をかへて、印畫が直ちに圖案模樣に應用出來るやう撮影してゐる、こ丶にも東洋氏の才が遺憾なく發揮されてゐる、收むるところ四季の植物百餘種を一頁二葉づ丶收めたが、濱ひろがほ、ほたるぶくろ、へうたんなどは、全くそのまま圖案となり模樣となつてゐる、それから、十五のべんけいさうの葉の重れ方や、鳥瞰的に見たチューリップ、鉢植のウォルフラワなど圖文式で面白く、さうかと思へばつたやたけのやうな古典的に富んだものもある、植物の分類などには頓着せず形態を主とした處が此の書の特色とすべきであらう、裝幀もこれまでのものとは趣きを異にして、純大和綴とした。（七圓五拾錢）送料二十一錢

啓明帖第二

丸紅商店の考案部が苦心に苦心を重ねて發表した、婚禮衣裳、黑振袖夜會服、色振袖中年婦人の社交着等それ／＼に時代の好尙を考へて工夫したもの、訪問着の『秋山錦』は洋畫風を取入れて模樣の上に新紀元を劃したが、肩先の空などは一工夫要するであらう、黑紋附の『東照宮』はや丶輪出向の觀あり、『秋錦』は構圖が面白い、『慶長』は目覺むるばかりの美しさ、敢へて新味はないが堅實なものである、大菊は美しいけれども、硬質磁器の模樣じみてゐる『高風』は品で見せやうとしたが、鶴は矢張り白い丹頂の方が品がある、『讃秋』は絢爛で美しい、『みやび』は有職模樣を程よく取入れてゐる、圖案の配置も巧みである、『佳き日』の松葉は構成が面白く此の輯での傑作といへやう、總じてモダン趣味のもの多く、古典的なのが少い（定價八圓五拾錢）

國立公園寫眞集

岡田紅陽　山田應水著

風景寫眞の泰斗として盛名を馳せてゐる山田應水、岡田紅陽の兩氏がカメラの技を發揮した全國の國立公園寫眞百數十葉を美しい網版の寫眞集としたもの、先づ北海道の阿寒湖から大雪山、本州で日光、十和田富士箱根、中部山岳、吉野熊野、大山瀨戶內海、九州の阿蘇、各圖それ／＼得意の腕を揮つて十數葉づ丶を撮影した、殊に阿寒富士阿寒大觀などは雄大なる眺望、見るからに爽快を覺えしめる、十和田はあまりに風景が纏まり過ぎてゐるが中部山脈の日本アルプス風景となると、何れも面白く、河童橋と穗高、大正池と燒岳、白馬岳の雲海、乘鞍の二圖など何れもよい、吉野熊野では岡田紅陽氏が腕を揮ひ、大山では山田應水氏が大山遠望に氣を吐いてゐるし說明三十餘頁中々よく盡してゐる。（定價貳圓）送料二十一錢

美術グラフ

三色版と一色版で全卷を埋めてゐる美術雜誌で體裁もよい、編輯も中々器用に出來てゐるが、慾には今少しく新しい展覽會の紹介がほしいと思ふ。（定價參拾錢）送料四錢

金井紫雲編　各大家推奬

藝術資料

合本　植物篇　第一卷

第一冊　『櫻』

口繪
智積院　櫻花圖襖繪（原色版）
乾山筆　櫻花春草圖（玻璃版）
外に寫眞版十八枚

本文
櫻の概說
櫻と史實
櫻の名稱語源
櫻の品種
倭漢朗詠集の櫻
櫻の名畫
櫻の畫と風物
櫻の故事傳說
工藝美術に現はれた櫻
萬葉集の櫻
櫻の漢詩
櫻の名歌
芝居の櫻
櫻の名所
櫻の名木
櫻の名句

第二冊　牡丹　芍藥　藤

口繪
大覺寺襖繪牡丹（原色版）
大安寺藤襖繪（玻璃版）
外に寫眞版十八枚

本文
（牡丹）
牡丹の概說
牡丹の名稱考
牡丹の異名、雅名
牡丹の物語
牡丹の九品
牡丹の品種
牡丹の名畫解說
牡丹の畫題
牡丹の詩
牡丹の歌
牡丹の句
（芍藥）
芍藥の概說
芍藥の名
繪畫の芍藥
芍藥の詩文
かほよぐさ
芍藥の歌
芍藥の句
藥草として
（藤）
藤の花
藤の花の傳說
源氏物語の藤
謠曲「藤」—藤娘
藤の歌
藤の名畫
藤の名木
藤の句

第三冊　燕子花　花菖蒲　卯の花

口繪
御物抱一筆燕子花鷭圖（原色版）
光琳筆燕子花屛風（玻璃版）
外に寫眞版十八枚

本文
燕子花花菖蒲圖入
（燕子花）
燕子花雜考
伊勢物語の八つ橋
謠曲「杜若」
杜若の文字
燕子花の名作
燕子花の名歌
燕子花の名句
（花菖蒲）
端午と菖蒲
菖蒲の傳說と戲曲
菖蒲の歌
花菖蒲の品種
花菖蒲の名所
（卯の花）
卯の花概說
枕草子の卯の花
卯の花の繪
卯の花の歌
卯の花の名句

第四冊　柳　躑躅

口繪
廣重筆木曾街道洗馬圖（原色版）
狩野信政筆柳襖繪（玻璃版）
外に寫眞版二十枚

本文
（柳）
柳の概說
楊柳十題
柳の名畫
柳の畫題
謠曲遊行柳
倭漢朗詠集の柳
詩經の柳
柳の漢詩
萬葉集の柳
柳の名木
柳の名歌
芝居の柳
俗曲の柳
柳の名句
（躑躅）
躑躅の品種
躑躅の畫
躑躅の漢詩
躑躅の歌
躑躅の名句

以上四冊　合本定價　金五圓　送料三十三錢

第一期植物篇

（太字は既刊分）

第一冊　櫻
第二冊　牡丹、芍藥　藤
第三冊　燕子花　花菖蒲　卯の花
第四冊　柳、躑躅
第五冊　竹
第六冊　蓮、睡蓮
第七冊　秋草
第八冊　菊
第九冊　紅葉
第十冊　松
第十一冊　梅
第十二冊　春の花
第二期　鳥類篇　十二冊
第三期　哺乳類篇　十二冊
第四期　蟲魚篇　十二冊

一鳥一獸姿態美の眞趣把握

岡本東洋撮著

鳥獸百種

京大理科教授　川村多實二博士校閲
京都動物園　星野敏謙氏解說
◇福田平八郎畫伯
◇山口蓬春畫伯序文

新菊倍判（大色紙形洋裝）　八切コロタイプ版壹百圖　特價　金五圓　送料　四拾五錢

曩に『花鳥寫眞集』續きて『花鳥風月』を出して、印畫藝術の上に一新紀元を劃し、嘖々たる好評を博した岡本東洋氏は、更に捲土重來の勢を以て、新に『鳥獸百種』を出すに到つた、その精力眞に驚くべく、その技や誠に三歎に値する、その鳥獸の姿態をレンズに收むるに當りては、極めて周到なる用意のもとに、その透徹せる審美眼を以てしたのであるから、何れもよく動物の生命を摑み、眞趣を寫して個々躍動し、然も詩趣津々として畫面に溢るゝを見る、尙解說は簡潔その要を盡されてをり鳥獸飼育の體驗者にして始めて爲し得るもので、加ふるに斯界の權威川村博士の嚴密なる校閲を經しもの、寫眞と解說と相俟ち畫家は以て制作上の範となすべく詩人は以て詞藻の泉となすを得、各學校にありては教材資料として將又絕大なるものである。

◇内容見本御申込次第御送り致します◇

發行所　合名會社　芸艸堂
京都市寺町二條南　電話上二九〇番　振替穴阪二五八番
東京市本郷區湯島一　電話下巻三六〇〇番　振替東京四〇九四〇番

京都南禪寺名寶扇面屏風の集大成

南禪寺 加藤至道老師題字
天授庵 藤田月洲師題簽

源豊宗氏序文

上卷及第一輯發行

天地一尺一寸五分
横 一尺五寸七分
精巧原色版
高級玻璃版

（上卷目次）

一 波地圓窓秋草双禽
二 白鷺夏草
三 月下秋草
四 薔薇と大瑠璃
五 枇杷栗鼠
六 波地に眞葛屏風
七 秋草と四十雀
八 飛泉遊鳧
九 秋草扇面散山水
一〇 萱草鶺鴒
一一 櫻楓群禽
一二 桐花鳳凰
一三 秋草競妍
一四 春秋花卉練鵲
一五 秋郊鳴鹿
一六 月下秋籬
一七 牡丹睡猫
一八 櫻下駿馬
一九 松下群鶴
二〇 うばら垣
二一 椿と鶏
二二 牡丹に鶏
二三 雪中双雀
二四 秋草遊蝶蜻蛉
二五 水墨栗柿

中卷 花鳥篇

下卷 山水人物 水墨花鳥

甲會員
畫帖仕立帙入
各卷二十五葉
定價 金貳拾圓
特價 金拾八圓
送料 五十錢

乙會員
全七十五葉
毎輯五葉袋入
定價 金四圓
繼續會員に限り
特價 金參圓五拾錢
送料 三十三錢

發行所 合名會社 芸艸堂
京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替大阪二五八番
東京市本郷區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番

◇紫雲藝術叢書◇

鳥と藝術

金井紫雲著

四六判三二九頁 木版刷裝幀全一冊
口繪原色版・コロタイプ版二十九葉
定價金參圓 送料二十一錢

◇荒木十畝畫伯題簽
◇森 白甫畫伯
竹原嘲風畫伯裝幀

本書には鳥類の中で藝術に深い交渉をもつもの五十三種を擇び鳥が藝術上から如何に眺められ、如何に味ははれ如何に描かれてゐるかを說き、鳥に因む畫題を說き、典據を示し更に鳥を描いた古今の名作を擧げ、鳥と藝術のあらゆる文獻資料を蒐めしもの。題材の新奇、行文の暢達、口繪の鳥の名畫と善美を盡した裝幀と相俟ちての好著、敢へて世の美術家、歌人、俳人、一般趣味家に一讀を煩す所以である。

—既刊—

◇續刊◇天象と藝術・山水と藝術

花と藝術	非水畫伯裝幀 笛畝畫伯裝幀 口繪二十八葉 本文二六八頁	東洋畫の特長とする花鳥その花木のうちで特に東洋畫と交渉の深い五十種を選び花木の美術及び文學との關係を詳述せる好著なり
樹木と藝術	十畝畫伯題簽 笛畝畫伯裝幀 口繪二十七葉 本文二七八頁	樹木がいかに藝術の上に現れてゐるか繪畫にはいかに扱はれてゐるか植物學的の說明から語源、傳說、その描かれた名畫をあげて詳述せり
草と藝術	玉堂、清方、青邨畫伯裝幀 口繪三十葉 本文三一二頁	たんぽぽ、すみれを始め八十五種の草について一々說明し、その草にあらはれた文字や繪を擧げ藝術家の好參考資料とせるもの
動物と藝術	靱彥畫伯題簽 岳陵畫伯裝幀 口繪二十七葉 本文二九九頁	哺乳類約三十種に就てあらゆる古今の文獻を涉獵して、藝術との交渉を明かにし口繪の動物名畫と善美を盡した裝幀と相俟ちての好著なり
魚介と藝術	青邨、南風、希望畫伯題簽裝幀 口繪三十葉 本文三一二頁	河海の魚類を初め甲殼類、貝類に至るまで苟も水產物にして藝術に交渉を有するものは悉く此を收めて餘蘊なく極めて興味深き研究書なり
蔬果と藝術	百穗畫伯題簽 蓬春畫伯裝幀 口繪三十葉 本文三二〇頁	蔬菜果實菽約六十種の色彩形狀、その來歷名稱、傳說や故事、詩歌俳句、これを表現した名畫名作、苟も藝術に緣あるものよくこれを收攬して剩さず
虫と藝術	翠雲畫伯題簽 咄哉州畫伯裝幀 口繪二十八葉 本文三〇五頁	昆虫類をはじめ、兩棲類、爬蟲類、腹足類等の中で普通に虫と呼ばれてゐるものの中から、藝術に緣のあるもの、約四十種を選み、あらゆる古今の文獻を涉獵す。

◇四六判 各冊 定價金參圓 送料二十一錢◇

—目次—

鶴鶯鷽連雲燕瑠鳩尾叭雉
雀雀 璃鴿長々鳥

山杜翡鵲佛野白伽孔鷹鷲
鳥鵑翠 法僧雞鸚鳥藍雀

鳶木梟橿鷺鵜鳰秧鷂鴉鶺
兎鳥 雞鴿

雀鶲鴫四掠鵠百鶫獦啄鶉
十雀鳥 舌 子鳥木鳥

雁鴨鴛千都鸚鷲雞鳳
鴦鳥鳥哥鳥 凰
以上五十三種

發行所 合名會社 芸艸堂
京都市寺町二條南
電話上二九〇番
振替大阪二五八番
東京市本郷區湯島一
電話下谷三六〇〇番
振替東京四〇九四〇番

翠光花

福田翠光畫伯筆

◇氣韻生動の新花鳥版畫五十餘幀上梓
◇畫伯得意の花卉鳥蟲の姿色千容萬態

西山翠嶂畫伯題字
川村多實二博士序文
堂本印象畫伯讃文
金井紫雲先生解説

福田翠光畫伯は我が京都畫壇の俊秀、花鳥畫を得意として造詣極めて深く、その畫く處の花卉翎毛は、よくその眞を捉へ、精を盡し、然も詩趣横溢、一作出づる毎に好評嘖々たり、今回多年の蘊蓄を傾注して、新に花鳥版畫の刊行を試む、蓋し畫伯が會心の作を、我が邦獨特の木版藝術に托して刊行せんとするなり、上梓の各輯何れも筆致高雅にして清新、描く處の動植物、皆生動して誤りなく、木版の技、また優秀にして原畫の趣きを寫し間然する處なし。美術工藝家の參考資料としては勿論、海外への我邦花鳥版畫の趣味普及に、家庭においては壁間の裝飾畫として絶好のもの、敢てこれを江湖に推奨する所以なり。

◇内容見本御申込次第御送り致します◇

發行目次

第一輯
1 芍藥と虹
2 石榴小禽
3 虞美人草

第二輯
4 粟鶉圖
5 仙花八百合
6 鹿の子百合

第三輯
7 鷹
8 雞 其一頭
9 河原撫子と黄褐鴾

第四輯
10 牡丹
11 夜會草
12 大神樂棒

第五輯
13 桐花小禽
14 秋海棠
15 伯勞紅樹
以下續刊

頒布略規
竪一尺三寸 横九寸
最前寒別遞奉書越高純木版印刷
第一期五十幀刊行
毎月一輯三葉宛發行
十七輯にて完了
（最終二葉）
一輯 定價 金六圓
毎月繼續會員 特價 金五圓
送料三十三錢
特典 繼續會員へは最終配本二葉と共に五十幀入帙贈呈

發行所 合名會社 芸艸堂
京都市寺町二條南 電話上二九〇番 振替口座京都二五八番
東京市本郷區湯島一 電話下谷三六〇〇番 振替東京四〇九〇番

岡本東洋撮著

東洋花鳥寫眞集

——全五十輯一千葉完結——

花鳥を撮影する技術に就いて、獨特の味を有つつてゐる岡本東洋氏が、特に日本畫家の參考とする爲めに動物、植物の藝術的撮影を試み、これを『靜』と『動』の二部に分ち逐次刊行を企てたのが此の東洋花鳥寫眞集である、その收むるところ、氏の得意のものばかりであるから、寫眞そのものが既に立派な藝術品となつてゐることはいふまでもない。『靜』は植物やその他の自然現象の一部を收め『動』は主として動物の姿態を寫してゐる。その丹頂の部を見ても、先つ九皐に鳴く氣高い姿をはじめ、孵化後二日目の巢籠り、歩む姿、巢籠り三態といふ風に技術を進めて行き更に畫家の寫生の勞を助けるために雄鶴の首、羽擴げ立ち止る脚といふ樣に部分の撮影まで試み、よく丹頂そのものゝ眞を摑んでゐる。一葉一葉既に繪畫となつて現はされてゐる。

再版出來全輯揃

（動之巻目次）

一 丹頂鶴
二 鴛鴦
三 虎
四 鯉
五 鹿
六 鷺
七 鵞鳥
八 鷄
九 鴨
一〇 狗
一一 馬と牛
一二 雪
一三 孔雀と七面鳥
一四 小鳥
一五 猫と猿
一六 山羊と栗鼠
一七 鳩
一八 家鴨と鷺鳥
一九 白鳥・黒鳥
二〇 鷺と烏
二一 兎・狸・狐
二二 金鶏銀鶏
二三 小鳥（一）
二四 丹頂鶴（二）
二五 雉子・鶉

（靜之巻目次）

一 水雪
二 寒の花
三 春の花
四 五月の花
五 水邊の花
六 夏の花
七 八月の花
八 水鄕
九 十月の花
一〇 秋の花
一一 雪（一）
一二 松
一三 雪（二）
一四 薔薇と牡丹
一五 春の野
一六 若葉の頃
一七 池畔
一八 海
一九 山
二〇 湖邊
二一 庭
二二 梅
二三 竹
二四 松の雪

第三回豫約募集

◇精巧コロタイプ印刷◇四切判臺紙附◇各輯二十葉袋入◇
定價金參圓 送料貳拾貳錢（内容見本進呈貳錢切手封入御申込乞）
全五十輯 定價金百五拾圓 上製定價金貳百圓

發行所 合名會社 芸艸堂
東京市本郷區湯島一 電話下谷三六〇〇番 振替東京四〇九〇番
京都市寺町二條南 電話上二九〇番 振替口座京都二五八番